# 第三編　音韻變化の進行過程

## 一

まづ第一に注意すべきことは，音韻變化は口先で起るものではなく，頭の中で起るものだ，といふ事實である。たとひその時代にその言語社會に屬するすべての人の發音運動の上に前代と異なる或共通の特色が現れてゐたとしても，その特色が各人の頭の中にある音韻觀念に影響してその性質を變ずるに非れば，未だ音韻變化が起つたものとは言ひ得ないのである。又，或一定の語について言へば，その中に含まれた或音の發音法の上で，たとひ前代と異なる或特色がすべての人に現れてゐたとしても，その音を發する運動の理想たる音韻觀念の上に變化が起るか，もとの音韻觀念がもはやその位置に存在せざるに至るか，或はもとの音韻觀念とは異なる別の音韻觀念がその位置を占めるやうになるかに非れば，未だ音韻變化が起つたものとは言ひ得ないのである。之を要するに，音韻變化は，現實に於ける發音運動の變化ではなくて，發音運動の理想(卽ち目的觀念)の變化である。(註1) 例へば，近世の日本語でハの音が fa から ha に變化したといふことは，何も口先の發音が〔Fa〕から〔ha〕に變つたといふ意味ではない。發音運動の理想が《Fa》から《ha》に移つたといふ意味である。口先の發音の上では，三百年前の《Fa》も〔ha〕といふ形で實現されることが有つたかも知れない。

さて，音韻觀念は，われわれが過去に於ていろいろな人から聽いた無數の音聲の印象の蓄積から生じたものである。而して，音韻觀念の基礎は言語習得の初期に出來上り，その後は既に自己の有する音韻觀念に外來の印象を同化して聽くのである。併し，かかる同化卽ち認識作用の起る度毎に，

外來の印象が少しづつ音韻觀念自身の性質の上に變化を與へることは免れ得ない所である。固よりその影響は一つ一つの場合について言へば極めて微弱なものに過ぎず，或一回の印象が音韻觀念に與へた影響も，次回の反對的傾向の印象によつて相殺され，結局音韻觀念の性質には何らの變化をも起さない場合が多いであらう。音韻觀念を或一定の方向へ永久的に變化させる程の影響を與へるためには，同一傾向の印象が極めて頻繁に經驗されなければならない。それ故，或個人の有する音韻觀念が一定の方向へ永久的に變化する時は，卽ち，發音運動上のその同一傾向がその言語社會全體に現れてゐる時である。從つて，音韻觀念のその方向への變化は，個人的條件の差異によつて多少前後することは有らうが，大體同じ頃に，その社會のすべての成員の上に現れて來るものである。畢竟，音韻觀念が社會的なものであると同樣，その一定方向への變化も亦社會的に起る現象である。

但し，一層嚴密に言へば，個人の持つ音韻觀念が，同一言語社會に屬する他の人々の發音運動によつて影響され，變化を生ずるといふことは，決して單なる聽覺的受容的な過程ではない。他人の發音を聽くことによつて，心理學者の所謂類似反應 (Die ähnliche Reaktion) を生じ，自らも知らず識らずそれに似た發音をなすやうになり，かやうなことが度重なるに及んで，つひにはその傾向が音韻觀念の上に固定されるやうになる。かかる動的過程は，前述の靜的受容的過程と同時に働き，相助けて音韻變化の原因をなすものであるが，兩者は緊密に相結び，現實的には不可分な一過程として作用しつつある。抑，聽覺を通じて與へられた隣人の發音運動に對して，かやうに無自覺的に反應を起すことは，社會的動物たる我々には生得的に具つた性質であり，幼時に於ける發音の習得も，これによつて始めて可能になるのである。我々は，單に感覺として音響を受容するにとどまらず，外部的もしくは內部的反應(共感)によつて，相手の意圖を具體的に理

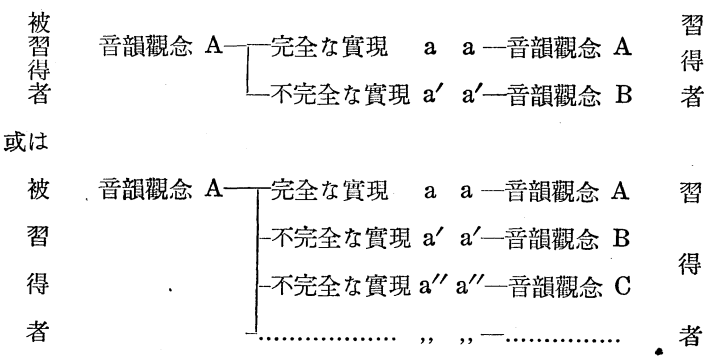
解するのである。さて，我々に對する環境の壓力は强大なもので，社會の大多數の人々の示す傾向には，自分も知らず識らず惹きつけられて行くものである。併しながら，反應は全然無批判的に行はれるものではない。自己の本來の好みに背いた知覺內容に對しては，何となく反應を澁る傾向を生ずること，勿論である。ここに，言はば無自覺的な選擇が行はれる。かかる選擇は，個人的に行はれるのみならず，自然と社會的にも行はれるやうになる。かくて，同一言語社會に屬する人々相互の間には，心理的に影響しあふ結果，自ら或程度の共通な發音傾向を生じ，それが繰り返し知覺され反應される結果，次第に各人の音韻觀念にも影響を與へ，之を或方向へ徐々に變化せしめるに至る。

もつとも，音韻觀念に變化の起るのは，個人々々について見れば，必ずしも嚴密に同時なのではなく，一人々々の素質や環境の異なるにつれて，多少相前後する筈である。今，最初に變化の生じた個人たちを a と呼ぶならば，a の出現するまでには，發音運動上のその同一傾向は，既にその言語社會全體に現れるやうになつてゐたものと考へなければならない。然るに，既に a の出現した後には，a に於ては發音運動上のその同一傾向はいよいよ恆常的になつてゐる筈であるから，彼等の影響は，彼等以外の人々の持つ音韻觀念をその同一方向に變化せしめることを，一層助長し一層速かならしめる道理である。

音韻變化は，かやうにして個人の一生涯の間にも絕えず起りつつあるものであるが，言語が新に習得される際にも亦起るものである。新に言語を習得する小兒は，既得の音韻觀念に新來の經驗を同化して聽く成人の場合とは異なり，外來の印象のみから全く新しく音韻觀念を獲得するものであるから，その時代その言語社會に現れてゐる發音上の新傾向は，前者の場合よりも後者の獲得する音韻觀念の性質の上に一層よく反映するわけである。

さて，日常の發音に際して，音韻觀念は，强音の有る位置では比較的完

全に實現されるけれど，强音の無い位置ではただ不完全に實現されるに過ぎない。それ故，强音の位置が各語について定まつてゐるやうな言語では，もし何らかの事情で音の强弱の差が極めて著しくなるやうな傾向が社會全體の上に起つたとすれば，强音の無い位置では，音韻觀念が常に極めて不完全にしか實現されず，時には相異なる二つ以上の音韻觀念が殆ど同じ形で實現されることも有り得る故，新に言語を習得する小兒にとつては，それが如何なる音韻觀念の實現であるかを正しく認識することが困難になる。而も，音韻觀念が强音無き位置で實現される場合には，隣接音韻の影響を受け易く，前後の條件によつてさまざまの形をとる故，(註 2) いよいよさうである。この傾向が甚だしくなると，小兒はつひに，音韻觀念 A の不完全な實現である音聲 a′（又は a′, a″,……）を，もはや音韻觀念 A の實現としては受け取らず，別の音韻觀念 B（又は B, C,……）の實現として認識するやうになる。卽ち




音韻觀念 B（又は，B, C,……）は，その言語社會に以前から行はれてゐるものでもあり得るし，又今回新しく習得者の頭の中に發生したものでもあり得る。

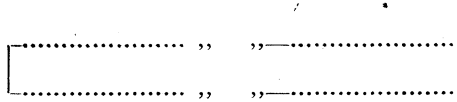
次に，「青」《ao》「赤い」《akai》「土產」《mijaŋe》は，最も丁寧に發音する場合には，〔ao〕〔akai〕〔mijaŋe〕といふ形で現れ，音韻觀念《a》は皆

略一樣に〔α〕の形で完全に實現されるけれど，單に言語の意義を理解してもらふといふ目的を果すためならば，必ずしも常にこれ程丁寧に發音する必要は無い。それ故，普通には，例へば〔αo〕〔ä̈kaĭ〕〔mijæŋe〕といふ風に，同一音韻觀念《α》が〔α〕〔ä̈〕〔a〕〔æ〕等いろいろまちまちな形で實現される。概して，音韻觀念は，言語の理解に差しつかへの無い限り，それぞれの條件の下に許された動搖範圍の中で，なるべく勞力の省けるやうな形で實現される傾向がある。もつとも，通常の狀態では，必ずしも常に出來るだけ樂な發音法を採るとは限らず，ただ理想よりは稍樂な發音法を採る程度にとどまることも有り得る。然るに，何らかの事情により，一般の發音運動又は特定の發音器官(例へば脣)の運動に對して注意を怠る傾向がその言語社會全體の上に起つたとすると，一般の又は特定の音韻觀念の實現に際して動搖範圍が擴大されることとなり，從つて或條件の下では發音運動の理想を遠く離れた形で實現されることも起るやうになり，更に進んでは，それが寧ろ普通の習慣となるに至る。かかる傾向が餘り甚だしくなると，その時代に言語を新に習得する小兒にとつては，それが如何なる音韻觀念の實現であるかを正しく認識することが困難になり，つひには，音韻觀念 A の或條件下に於ける實現である音聲 a′（又は a′, a″,……)を，もはや音韻觀念 A の實現としては受け取らず，別の音韻觀念 B（又は B, C, ……）の實現として認識するやうになる。(註 3) 卽ち

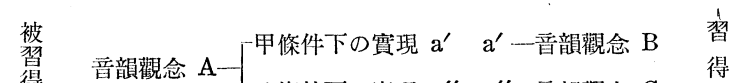
| 被習得者 | | | | | 習得者 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 音韻觀念 A | 甲條件下の實現 a | a | —音韻觀念 A | |
| | | 乙條件下の實現 a′ | a′ | —音韻觀念 B | |

或は

| 被習得者 | | | | | 習得者 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 音韻觀念 A | 甲條件下の實現 a | a | —音韻觀念 A | |
| | | 乙條件下の實現 a′ | a′ | —音韻觀念 B | |
| | | 丙條件下の實現 a″ | a″ | —音韻觀念 C | |



音韻觀念 B (又は B, C,.....) は，その言語社會に以前から行はれてゐるものでもあり得るし，又今回新しく習得者の頭の中に發生したものでもあり得る。但し，場合によつては

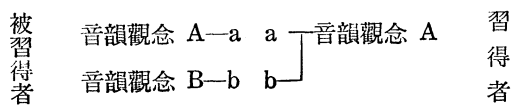



のやうに，もとの音韻觀念 A の消失してしまふこともあるであらう。

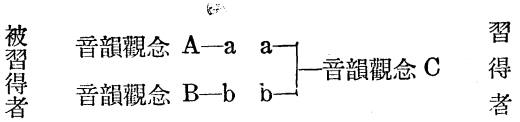
以上述べたやうな音韻の分化の問題に關しては，O. Jespersen が小兒の言語について述べてゐる次の記述が參考になる。「R はむづかしい音である。Hilary M. (滿二年) といふ子は彼女の言葉の中に r を使はない。語の首では w となる。run を〔wʌn〕と發音する。語の中途で母音の間に插まると l になる。very, berry を〔veli〕〔beli〕と發音する。子音に連結すると r は消える。cry, brush を〔kai〕〔bʌʃ〕と發音する。Tony E. (一年十ケ月から滿三年)は r が語の中途で母音に插まる時，始めの中 d を使ひ，very を〔vedi〕と發音し，後に至つて g〔vegi〕となつた。同樣に Muriel を〔mu·gi〕, carry を〔tægi〕といつた。又屢〻語の首で r を脫落させる。room の代りに oom といふ。r の代りに w を使ふやうな子供でも，〔tr〕の代りに〔tʃ〕を使ひ〔dr〕の代りに〔dʒ〕を使ふこと珍らしくない。例 tree, drawer の代りに chee, jawer といふ。この例を見ると，吾々には一つの音であつて一箇の字母で書き表すものも，子供の耳にはちがふ音にきこえるといふ事實がわかる。一體音聲は，語の中の位置や前後に連結する他の音によつて調節位置がちがふものであつて，この點で音聲學者は子供のする發音法に通例贊成の意を表する。ただ子供はちがひの點を過大に發音し，吾々は同一字母を使つて類似點を過大視するだけで

ある。(註 4)」さて，現代英語で，音韻《r》は勿論場合によりさまざまの形で實現される。併し，普通の場合には，ここに引かれた小兒らの發音の場合程相互にかけ離れた形で現れることは有るまい。それ故，小兒らの發音もその目的觀念も，成長するに從つて矯正され，結局それがすべて同一の音韻觀念《r》の實現であることを習得するやうになるのであらう。併し，もしその當時の社會全體の傾向として，音韻觀念《r》がいろいろな條件の下で實現される際その形が相互に非常に違つて現れること，小兒らの發音の場合と大差無い程だつたならば，小兒らの發音は別段矯正されること無くして成年に及び，その目的觀念(音韻觀念)も亦最初《w》《l》《ʃ》《ʒ》等別々の形で記憶されたままで一生保存されるやうになるかも知れない。

次に，何らかの事情によつて，その言語社會全體にわたり，一般の發音運動又は特定の發音器官の運動に對して注意を怠る傾向が起つたとすると，一般の又は特定の音韻觀念の實現に際して動搖範圍が擴大され，その結果，相類似せる二つの音韻觀念 A, B が，實際上同じ形で，又は殆ど同じ形で實現される場合が多くなる。かやうな傾向は，勿論，A と B との差別が語義を區別する上に極めて重要なものである場合には，話手がその發音を力めて區別する故，餘り著しくは起らない。併し，A と B との差別が語義を區別する上に餘り重要でない場合には，兩者の發音は遠慮無く混同される。この傾向が餘り甚だしくなると，その時代に新に言語を習得する小兒にとつては，それらの發音の中，或者は A の，或者は B の實現であるといふことを一々辨別することが困難になり，結局，それらを唯一つの音韻觀念の實現として認識するやうになる。卽ち




或は



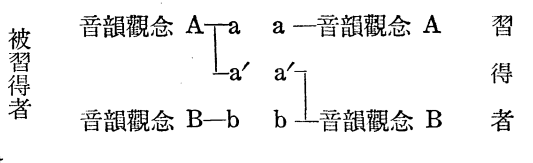

但し，a と b とは極めて相近い音であり，實際上は屢同じ音でもあり得る。

以上述べたやうな音韻の合一の問題に關して，次の諸事實は多少參考になるであらう。私の姪の一人は，三四歳の頃までも《b》と《w》とを全く混同し，兩者を共に〔b〕又は〔v〕で發音するのが習慣であつた。蓋し，日本語の《b》は概して閉鎖の力が弱く，殊に母音と母音との間では〔v〕のやうに緩く發音される傾向があり，一方，《w》は脣の圓みに乏しい點でいくらか〔v〕に似た性質を持つてゐる。かやうな類似點が，小兒の不熟練な耳に觸れて，兩者を同一音韻の實現であるかの如く感ぜしめるに至つたものであらうと思はれる。もつとも，この《b》と《w》との發音上の區別は，現代日本語では一般には明瞭に維持されてゐるので，この小兒も成長するにつれて漸次發音を矯正され，後にはこの區別を正しく習得するに至つた。併し，もし成人の發音に於てさへ《b》と《w》とが屢同一又は近似の形で實現されること小兒の發音の場合と大差無い程度であつたとすれば，小兒の發音は別段矯正されること無くして成年に及び，その目的觀念(音韻觀念)も亦唯一つのものとして記憶されたままで一生保存されるやうになるかも知れない。(バ行子音とワ行子音との合一は，既に八重山方言(註5)に於て實際に起つてゐる。)

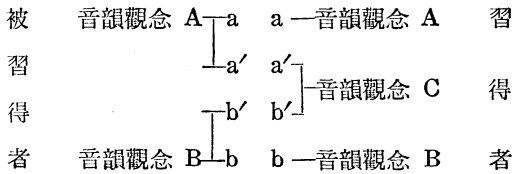
A. Grégoire の調べたベルギーの二少年は，一時，有聲子音の代りに無聲子音を用ゐる傾向が甚だ强かつた。卽ち，兄は，生後二十ケ月の頃，有聲破裂音〔d〕〔g〕〔ɟ〕を全然用ゐず，〔b〕を用ゐるべき所にも屢〔p〕を用ゐた。例へば，*bobin* を〔pɑpin〕と言ふが如く。又，弟は，生後十九ケ月の頃には有聲破裂音〔b〕〔d〕を用ゐることが甚だ稀であり，その後も，例へば *bête* を〔pɛ:t〕とも〔bɛ:t〕とも言ひ，*prune* を〔pyn〕とも〔byn〕

とも言ひ，*la dame* を〔*a* tam〕と言ひ，*un ver* を〔ə ve ə fe:〕と言ひ，*Jésus* を〔sesy〕と言ふなど，滿二年の頃までも未だ有聲子音と無聲子音とを區別することが出來なかつたといふ。(註 6) もつとも，有聲音韻と無聲音韻との發音上の區別は，現代フランス語では一般には明瞭に維持されてゐるので，これらの小兒も成長するにつれて漸次發音を矯正され，後にはこの區別を正しく習得するに至るであらう。併しながら，もし成人の發音に於てさへ有聲音韻と無聲音韻とが屢同一又は近似の形で實現されること小兒の發音の場合と大差無い程度であつたとすれば，小兒の發音は別段矯正されること無くして成年に及び，その目的觀念(音韻觀念)も亦唯一つのものとして記憶されたままで一生保存されるやうになるかも知れない。(北部支那語は，恐らく宋代の頃，(註 7) かかる過程を實際に經て來たものと思はれる。)

次に，音韻觀念 A の或條件の下で實現された形 a′ が，その發音運動の理想から遠く隔つて居り，寧ろ音韻觀念 B の實現された形 b (又は，音韻觀念 B の或條件の下で實現された形 b′) と，實際上殆ど同じ形である場合が多いやうな時には，新に言語を習得する小兒にとつては，もはや a′ を A の實現として受け取ることが困難になり，却つて a′ を b (又は b′) と共に音韻觀念 B (又は別の音韻觀念 C) の實現として認識するやうになる。卽ち




或は



但し，a′ と b（又は b′）とは極めて相近い音であり，實際上は屢同じ音でもあり得る。音韻觀念 C は，その言語社會に以前から行はれてゐるものでもあり得るし，又今回新しく習得者の頭の中に發生したものでもあり得る。

さて，ここに問題とすべきは，同一時代の同一言語社會に於ける音韻狀態の等質性の程度である。一體，われわれが自分の言葉を相手に理解してもらへるといふことは，卽ち，相手も亦自分のと同じやうな音韻觀念を頭の中に持つて居り，現實的にはさまざまの形で現れてゐる音聲を通じて，それが如何なる音韻觀念の實現であるかを把握し得ることを豫想してゐる。卽ち，音韻狀態の等質性は，或程度までは必然的に要求される。併しながら，音韻に關する個人々々の經驗は，嚴密に言へば必ずしも全く相等しいといふわけではなく，從つてその間には或程度の個人差が必ず存在する筈である。聽覺的效果の上に大差が無く，且言語の意義の理解に甚だしき支障を生ぜざる範圍內に於て，かかる個人差の存在は許されるわけである。例へば，その時代に於て社會一般の上に現れてゐる發音上の新傾向は外來の印象を既得の音韻觀念に同化して聽く成人の音韻狀態よりは，外來の印象のみから全く新しく音韻觀念を獲得する小兒の音韻狀態の上に，一層容易に影響するものと考へられる。それ故，同時代の人々の中でも，老人の音韻狀態と，若い人の音韻狀態とは，稍ちがふ筈である。卽ち，同一時代の同一言語社會に於ける音韻狀態と雖も，嚴密に等質的なものではなく，幾分むらが有るわけである。

音韻觀念は，その言語の使用者にとつては，一定不變のものと感ぜられる。何故なら，音韻觀念の基礎は言語習得の初期に於て既に出來上つて居り，その後は音韻認識の度每にごく微細な變化を蒙るに過ぎないからである。成年者が今更新しい音韻を習得するとか，幼時に甲乙二つの音韻を別別のものとして習得した人が老後に至つてその區別を忘失するとかいふや

うな大きな變化は，少くとも普通の場合には起り得ないことである。(勿論，外國語や他方言の音韻を有意的に借入する場合のことなどは別である。) それ故，音韻の分化や合同は，一般には小兒が言語を新に習得する際に起ることと思はれる。もし然りとすれば，音韻狀態の過渡期に於ては，親はもとの通り甲乙兩音韻を區別しておぼえてゐるけれど，子供はそれらに相當する所にただ一種の音韻をしか持つてゐない。或は，子供は甲乙兩音韻を區別しておぼえてゐるけれど，親はもと通りそれらに相當する所にただ一種の音韻をしか持つてゐない，といふ風な時代が有るわけである。卽ち，前に述べたやうな，同一言語社會に於ける音韻狀態の上に現れるむらの，相當に著しい時代が有るわけである。

例へば，音韻《ɔ》と音韻《o》とが相合して唯一つの音韻《o》にならうとする時期のことを考へて見よう。《ɔ》と《o》とを區別せず唯一つの音韻《o》をのみ習得した最初の小兒の現れた時から，《ɔ》と《o》とを區別しておぼえてゐる最後の人の死亡するまでの間，何十年かの過渡期に於ては，その同一言語社會の中には，《ɔ》と《o》とを區別しておぼえてゐる人と，唯一つの音韻《o》をのみ習得した人とが，同時に混在するわけである。概して，前者は比較的年長の人々に多かるべく，後者は比較的若い人々に多いであらう。そこで，若い人々が老人の發音を聽く場合には，音韻觀念《ɔ》の實現たる〔ɔ〕や〔ò〕をも，音韻觀念《o》の實現たる〔o〕や〔ò〕をも，皆同一の音韻觀念《o》の實現として認識するであらうから，別に問題は起らない。ところが，老人たちが若い人々の發音を聽くと，當然〔ɔ〕か〔ò〕の現るべき所に〔o〕が現れて來るし，又(同じ音韻觀念《o》でも，若い人々に於ては，その實現に際し，恐らく或條件の下で許される動搖範圍が擴大してゐる故)當然〔o〕か〔ò〕の現るべき場所に〔ɔ〕が現れて來る。無論若い人々の話を理解出來ない程のことは有るまいけれど，兎に角老人たちにとつては迷惑な話である。それ故，老人たちの立場から見る

と，若い人々の發音が正しくないやうに思はれて來る。（卽ち，この場合には，現に進行しつつある音韻變化が，或程度まで自覺されるわけである。もつとも，さりとて個人の力でそれを阻止することは出來ないけれど。）例へば，近世の琉球語に，次のやうな事實がある。「故護得久前代議士の父朝常氏から直接聞いた話であるが，その父常置翁（西曆一八二七年卽ち文政十年四月四日誕生）の青年時代に，麻文仁按司といふ七十歳位の老人がゐて，當時の青年がクビ（壁）とクビ（首）との發音を混同してゐるのをこぼしてゐたとのことである。これで見ると，今日から百年ばかり前は，首里語に，イより少し開いた，エに近い母韻の存在してゐたことがわかる。」（伊波普猷氏「琉球語の母音統計」[註8]）又，明治四十年頃の琉球語で，ハヒフヘホの頭音は，「首里及び大島の方言に於ては，十中の七八は F 音（フ フィ フ フェ フォ）であつて，漸次 h に遷るの傾向を有し」てゐたが，併し「沖繩に於ては少し年取つた人や發音に注意する人は h 音より F 音を可いとしてゐ」た（同氏「p 音考」[註9]）。現代の琉球語で「東京語の『タチツテト』に當る首里語の音節は，年長者の發音では大體〔ta, tʃi, tsi, ti, tu〕である。但し，若い人々の發音では tʃi と tsi の區別なく共に前者に近くなつてゐる。」（服部四郎氏「『琉球語』と『國語』との音韻法則」[註10]）又，「九州ではジとヂとは發音し分けると言はれてゐるが，私の住んでゐる土地（福岡縣）中心で言ふと筑前の方では區別しない樣であるが筑後に行くと區別してゐる。けれどもその差は輕微であり老人は區別するが若者は區別しない事が多いらしい。福岡縣八女郡・三潴郡あたりでは區別する人が四，しない人が六ぐらゐらしい。」（安田喜代門氏「中古の國語」[註11]）かやうな例は，集めて見たらなほいくらも有ることであらう。

次に，近代の北京官話で（多分元明の間のことであらう[註12]）sam（三）nam（南）等が san, nan 等に變化した事實について考へて見よう。この場合，《m》と《n》との間には，中間狀態の存在は考へられない。例へば，脣が

少し開きかけ，舌尖が齦に近付きかけて宙に浮いてゐるやうな狀態を理想とする音韻の用ゐられた時代が有つたとは思はれない。併し，さりとて，同一言語社會に屬するすべての人々が，何年何月何日何時何分何秒までは一人殘らずその位置に《m》を用ゐてゐたけれど，その瞬間から皆一齊に《n》を用ゐるやうになつた，といふ風な事實も，實際有つたとは思はれない。結局，少くとも數十年の間は，その位置に《m》を用ゐる人と《n》を用ゐる人とが，同一言語社會の中に同時に混在してゐたものと考へるより外はない。この音韻變化の原因としては，恐らく，之に先立つて，音節の末尾に於て脣の働きに注意を怠る傾向が，その言語社會全體に起つたものであらう。その結果，音韻觀念《m》が音節の末尾で實現される場合には，〔m〕の形で現れることも有るが，寧ろ〔n〕の形で現れることが次第に多くなつて來た。何故なら，兩脣を相接觸させることよりは，舌尖を齦に接觸させることの方が，ずつと樂に出來る。つまり，舌尖は兩脣に比すれば一層小形で敏活な器官であるし，舌尖を齦に接觸させるためには，兩脣を相接觸させる場合程に，口を強く閉ぢる努力がいらないからである。音節末尾の《m》が〔n〕の形で實現される傾向が，極めて一般的になると，この時代に言語を習得する小兒にとつては，音節の末尾に現れる〔n〕音の中で，音韻觀念《m》の實現であるもの(三〔san〕南〔nan〕等)と音韻觀念《n》の實現であるもの（散〔san〕難〔nan〕等)とを辨別することが困難になり，これらを一樣に同一の音韻觀念《n》の實現として認識し記憶するやうになつたものと思はれる。

以上のやうに，二種の音韻が(完全に，或は特定の條件の下に於て)相合同して唯一つの音韻にならうとする場合については，注意すべき問題がなほ澤山ある。第一，最後の結果の上から見ればただ《ɔ》と《o》とが相合して《o》になつたといふだけの事實であつても，詳しく見れば，果してすべての位置に現れる《ɔ》と《o》とが同時に相合したものであるかどうか

は分らない。或條件の下では早く，或條件の下では遲く，相合したものかも知れない。(註 13) 第二，過渡期に於ける個人と個人との相互影響が，問題を一層複雜ならしめる。例へば

(一) 《ɔ》と《o》とを區別して記憶してゐる人々に於ても，この時代に於ける兩音韻の差異は極めて僅かのものであらうし，實際の發音の上には兩音韻が同じ形で實現されることも多いであらう。そこで，《ɔ》と《o》とを區別して記憶してゐる人々相互の間でも，新に語を習得する際，偶然の機會から，被習得者が《ɔ》の積りで發音したものを習得者は《o》の實現と思ひ誤り，又被習得者が《o》の積りで發音したものを習得者は《ɔ》の實現と誤認する，といふ風なことは，有り勝ちなことである。かうして誤つて記憶された語形が，そのまま個人の言語意識の中に固定せられ，更に模倣・感染によつて他人の間にも廣まり，本來の形と並存し，或は，然るべき理由の有る場合には，つひに本來の形を壓倒して獨りその社會に通用するやうになることは，有り得べきことである。かゝる個別的の音韻取替は，未だその言語社會に屬するすべての人が《ɔ》と《o》を區別して記憶してゐる時代にも，起り得ることである。これについては，後に詳しく述べる積りである。

(二) その言語社會に屬する人々の大部分が《ɔ》と《o》とを區別せずただ《o》をのみ用ゐるやうになれば，《ɔ》と《o》とを區別して記憶してゐる少數の人々も，つひには大多數の人々に引かれて，本來《ɔ》を用ゐてゐた場所にも《o》を用ゐるやうにならう。但し，この場合と雖も，《ɔ》と《o》との區別を忘れてしまつたわけではなく，自分の持つてゐる二つの音韻《ɔ》《o》の中での《o》を用ゐるのである。つまり，同一の語について，《ɔ》を含む形と《o》を含む形と，二つの形が記憶されてゐることになる。(もつとも，第一の形は漸次忘却されてしまふかも知れない。) この種の現象は，恐らく普通には(個人的に，

又は或程度まで社會的に）限られた少數の語彙の上にのみとどまるのであらうと思ふ。

（三）かかる過渡期に生れた小兒の中でも，環境の如何によつては（例へば，比較的高齡な兩親や祖父母の手で養はれ，且言葉使ひによく注意するやうな家庭に育つた小兒）たまたま《ɔ》と《o》とを區別して習得する者も有るかも知れない。併し，かういふ小兒も，稍成長してよその子供と遊ぶやうになつたりすれば，それらの人々から全く新しく學ぶ語も加はつて來ようし，又既に《ɔ》の形で習得してゐる或語をも他の人々の影響で《o》に言ひ改めるやうな場合が有るであらう。それ故，この種の人々の言語に於ては，前の（二）の人々の場合と同じく，《ɔ》と《o》とは區別されてはゐるものの，その各の使用範圍は，本來の狀態とは餘程違つたものになつてゐる筈である。

この外，同じ時代に他方言又は文語の語形を借入するやうなことが有れば，問題は一層複雜になるであらう。以上いろいろ述べて來たやうな過渡期の狀態を示すものとして，O. Jespersen: A Modern English Grammar, Part I (3. ed., 1922), 11.32 などはよい例であると思ふ。

**註**（1）有力な學者の中にも，この點に關する理解の全く缺けた人がある。例へば O. Jespersen の如きがその適例である。氏は Junggrammatiker 風の音韻法則觀を難じて曰く，「彼は，話手が或位置に於て音 x を $x_1$ で置き換へたとすれば，x が『それと同一の音的條件』の下に在る限り，常に全く同一の置換が起らなければならない，といふ全く證明不可能な要請の上に立つてゐる。人間の慣習に於てそれ程完全な一貫性を假定すべき根據は全然存在せず，それは今の場合についても同じことである。否，却つて，音の動搖範圍に對する以前の限界を二三の場合或一方へ乘り超えることが有つたとすれば，次回には反對方向への乘り超えが起り得る，といふ見方の方に贊成すべき點が多々存する。而して，我々が音韻法則の發生過程を實際目擊する場合には，古い形と新しい形との間に常に動搖を認めるのである。例へば，我がデンマルクでは，次のやうな音韻法則を成就し始めてゐる人々が耳にとまることは，決して少數でない。卽ち，母音に挾まれた〔s〕が，强音ある母音の前に於て，半ば有聲の又は全然有聲の〔z〕になるのである。それは未だ純然たる個人的の發音であるが，たと

ひそれが二十世紀の中頃に，徹底した『音韻法則』になつてゐたとしても，敢て怪むには足らない。併し，現今この音韻法則を既に生じ始めてゐる個人たちは，決して普遍的にそれを使用するわけではない。卽ち，例へば besøge, basar, i sinde のやうな例を見るに，殆ど同じ呼吸狀態に於て殆ど同じ强勢狀態を以て同一語を發音する場合でも，時によつて〔s〕と言つたり〔z〕と言つたりするのが聽かれるのである。就中，私はかつて，上院議長が投票用紙を讀み上げる際，"de samme, de samme, de samme, ....." と言ふのに，その s を，或時は聲 (Stimme) を入れ或時は聲無しに發音するのを聽いたことがある。併し，私は，同人が何か他の結合の中でかやうに〔z〕を用ゐて發音したのを，別に聽いた覺えが無い。」(Zur Lautgesetzfrage, 1886——Phonetische Grundfragen, 1904, S. 161.) と。この記述は，發音運動そのものの觀察としては，正しくもあり有益でもあらうが，音韻變化の何たるかを全然解せざるものと言はなければならない。何故なら，音韻變化は，口先で起るものではなくて，頭の中で起るものだからである。上院議長が同一語を〔s〕で發音したり〔z〕で發音したりしたところで，議長の頭の中に在る音韻觀念がその度毎に變るわけではない。音韻觀念は終始不變である。同一の音韻觀念が，或時は〔s〕の形で，或時は〔z〕の形で實現されるに過ぎないのである。從つて，この種の事實を指摘して見たところで，音韻變化の一貫性 (Konsequenz) の主張を，何ら動搖せしめることは出來ないのである。(もつとも，Junggrammatiker の音韻法則觀については，私は決して全幅の贊意を表するものではない。私自身の音韻法則觀は，第四章に至つて詳述しようと思ふ。)

(2) 英語では，種々なる音韻が，極めて弱く發音される場合，皆一樣に〔ə〕の形で現れる。而して，この〔ə〕は，前後の音の影響によつて，いろいろな色合を示す。「〔ə〕音は，その中間的性質の故に，屢〻中性母音と稱せられる。それは語の中での位置によつて，多少性質が變る。卽ち，末尾にある場合 (*bitter* ['bitə〕に於けるが如き)には，その他の場合 (*about* 〔ə'baut〕に於けるが如き)に比すれば，明かに一層開いてゐる。この音は，又，幾分か周圍の音の性質によつても變る。例へば，*together* 〔tə'geðə〕の第一の〔ə〕は，次に續く〔g〕の影響により，實際上は非圓脣的〔u〕(音聲記號〔ɯ〕)になることが屢ある。」(D. Jones: An Outline of English Phonetics, 2. ed., 1922, p. 94.) 音韻觀念が强音無き位置で實現される場合，特に隣接子音の影響を受け易いことの理由については，「音韻觀念」篇第二章を參照せられたし。

(3) E. Sapir は，古代英語に生じた Umlaut 現象について，左のやうに述べてゐる。「foti ("feet") に於ては，その長い o が後の i によつて色づけられ，長い ö となつた。卽ち，o はその圓脣性と舌の中位の高さとを維持しながら，既に i の前舌性を採つたので，その結果として中間物たる ö が生じた。この同化現象は規則的に起つた。卽ち，すべて强音有る長音 o は，次の音節中の i に同化されて，長い ö へと機械的に發展したのである。例へば tothi ("teeth")

は töthi となり，fodian (" to feed ") は födian となつた。それも，最初の間は，o と ö との入れ替りは，何ら眞に重要なものとは感ぜられなかつたこと，疑無い。現今多くの人は，談話の際，you や few のやうな語の oo 音をドイツ音 ü の方向に變色するが，實際上，who と you とを充分相韻し得る語と認めることに障碍を來す程 oo から離れることは無い。古代英語に於ける右の現象も，最初は單にこれと同樣に無意識的な機械的な發音調節であつたに相違無いのである。併し，後にはやがて，この ö 母音の性質は o の性質からずつと懸け離れて，明確に區別された一母音として意識に上つて來たに相違無い。而して，一度 ö が明確に區別された一母音として意識されるやうになるや否や，föti, töthi, その他同樣な語に於ける複數の表現法は，もはや單なる結合的 (fusional) なものではなくて，象徵的 (symbolic) 且結合的なものとなつたのである。」(Language, an Introduction to the Study of Speech, 1921, pp. 186—187.) この場合，ö が「明確に區別された母音」卽ち獨立の一音韻になるとは，一體どういふ意味であらうか。音韻《o:》が，《fo:t》の場合と《fo:ti》の場合とによつて非常に相違した形 ([fo:t]——[fφ:ti]) で實現されるやうになつたとしても，それだけでは未だ音韻分化が起つたものとは言へない。新に言語を習得する小兒たちにとつて，この [o:] と [φ:] とが同一音韻《o:》の實現であることを正しく把握することが困難になり，その結果，兩者をあたかも相異なる二つの音韻《o:》《φ:》の實現であるかの如く誤認し，つひにその通りの形 (《fo:t》——《fφ:ti》) でこれらの語を記憶してしまつたものとすれば，それが卽ち音韻分化である。かやうなわけで，音韻分化の原因となる發音傾向は徐々に增大し來るものであるが，音韻分化そのものは，言語が新しい個人によつて習得される際に，突如として起るものである。

(4) O. Jespersen: Language, its Nature, Development and Origin, 1922, p. 107. 譯文は市河三喜・神保格兩先生譯「言語，その本質・發達及び起原」175 頁に據る。

(5) 宮良當壯氏著「八重山語總說」(「八重山語彙」附錄) (昭和五年) 24 頁，51 頁。

(6) A. Grégoire: L'apprentissage du langage, les deux premières années, 1937, pp. 205—208.

(7) 拙稿「漢字の朝鮮音について」(下) (方言第六卷第五號所載) 38—40 頁參照。

(8) 「琉球古今記」(大正十五年) 所收。

(9) 「古琉球」(明治四十四年) 所收。

(10) 方言第二卷第八號所載。

(11) 國語科學講座の中。

(12) 韻尾の m と n との區別は，元代の中原音韻には未だ保存されてゐるが，明末萬曆年間の利瑪竇の文獻や天啓年間の西儒耳目資には既に無い。この m か

ら n への變化は，朝鮮の崔世珍の四聲通解(明の正德十二年)の記載に據れば，その時代の支那語には既に起つてゐたことが分る。

(13)　例へば，スペイン語に於ける bello 《*v*eʎo》 boca 《*v*oka》 haber 《a*v*er》 beber 《*v*e*v*er》 等の 《*v*》 は，何れもラテン語の 《b》 (bellum, bucca, habere, bibere) から出てゐるものであるが，すべての 《b》 が同時に摩擦音化したわけではない。卽ち，ラテン語の母音に挾まれた b の摩擦音化は，その廣さに於てロマンス語の全領域に亙り，その古さに於て帝政ローマ時代までも溯り得るものであるが，語頭の b の摩擦音化は，唯スペイン語のみの特色であり(イタリア語 **bello, bocca,** havere, bevere, フランス語 beau, bouche, avoir, boire 等參照)，從つて前者よりも遲れて起つたものと考へられる。(參考。「スペイン語に於ける語頭の b と v との同音化は，卑俗ラテン語期まで溯るものではない。」「母音に挾まれた b が，開いて β になつたこと。この發展は，明かに第一世紀に始まり，第二世紀中にかなり進行し，而して，少くともイタリアに於ては，第三世紀中には完結した。」C. H. Grandgent: Introduction to Vulgar Latin, 1907, pp 133—135.)

## 二

音韻變化には，その行はれる範圍の上から見る時は，普遍的のものと個別的のものと，二つの典型を立てることが出來る。個別的音韻變化は，その原因及び起原を個人に有するもので，個々の語に對する偶然の聽き誤りや記憶の誤から起り，まづ個人の言語意識の中に固定せられ，時としては，模倣・感染によつて更に廣い社會範圍にも擴り得るものである。之に反して，普遍的音韻變化は，その原因及び起原を社會全體に有するものなるが故に，個人的な偶然な機會から起る變化とは異なり，それに關係する音韻は，少くとも一定の條件(これについては後に詳說する)の下に於ては，一般にその變化に與るものである。

音韻變化について立てられた普遍的・個別的といふ二つの型は，音韻變化を二つに分類したものではない。理論上立てられた二つの典型である。現實には，兩者の間には中間物が存在する。それについては，後で詳しく說明しよう。以下論ずる所のいろいろの問題について考へる場合には，この中間物は便宜上個別的音韻變化の一種と考へておいてよい。

次に，音韻變化は，その性質の上から見て，之を音韻そのものの性質に關するものと音韻の用法に關するものとに分つことが出來る。

音韻の本質變化とは，音韻觀念そのものの性質に變化を生じ(例へば音韻《F》が《h》に變化するが如き)，全然新しい音韻を發生し(例へば音韻《t》が分化して《t》の外に新しい音韻《ʧ》を發生するが如き)，又は或音韻の全く消滅する(例へば音韻《o》と音韻《ɔ》とが相合して唯一の音韻《o》のみとなり，《ɔ》の消滅するが如き)やうな事實を指す。音韻觀念は元來多くの人々から聽いた無數の音聲の印象の蓄積から生ずるものであるし，その或方向への移動も亦多くの人々から聽いた無數の音聲の印象が大部分同一傾向を示す場合に非れば起り得るものではない故，この種の音

韻變化は，個人の偶然の聽き誤りや記憶の誤に基く個別的の變化としては起ること能はず，必ず普遍的音韻變化又はそれに近い形で起るものである。

音韻の用法變化とは，既存の二種の音韻 A，B の中，或語の中で今まで A を用ゐてゐた箇處に今度 B を用ゐるやうになつたり（音韻の取替 Vertauschung），今まで或音韻を用ゐてゐた箇處に今度は何の音韻をも用ゐなくなつたり（音韻の脱落 Abfall）するやうな類の事實を指す。これらは，音韻觀念そのものの性質が變ずるとか，新しい音韻が發生するとかいふ風な大した出來事ではなく，ただ既存の音韻の用法が變るのみであるから，個人の偶然な聽き誤りや記憶の誤からも容易に起り得ることである。一體，我々は，一定の音韻の現れるあらゆる語あらゆる場合について，その音韻の最も完全に實現された形を實際經驗してゐるわけではない。我々が幼時以來耳から覺えた多くの語の中には，何十遍も聽いた後始めて記憶したやうなものも有らうけれど，中には僅か二三遍比較的不完全に實現された形を聽いたばかりで記憶してしまつたやうな語もあらう。後者の場合には，事によると，その中に含まれた音韻の全部が正しく認識されてはゐないかも知れない。卽ち，被習得者が音韻 A の實現として發した音を，習得者がふと誤つて音韻 B の實現として認識するやうなことが無いとは言へない。或は又，音韻を一つ位聽き落すことが無いとも言へない。かうして誤つて記憶された形は，多くはその後の經驗によつて矯正されることであらうけれど，元來餘り頻繁に用ゐられない語ならば，語形の正不正が自他に於て問題とされる機會が少いから，言葉使ひに餘り注意しない人は，誤つた形のままで一生押し通すことも有るかも知れない。(註 1) その上，場合によつては，更に他人（殊に當人の子孫など）がそれを模倣することにより，一層廣い社會範圍に傳播することも有り得よう。かくして，舊來の形と相並んで二重形 (Doppelformen) を成し，場合によつては，更に舊來の形を壓倒して獨り用ゐられるやうになることも有り得るわけである。（かかる場合，

新しい形が次第に廣範圍に傳播する事情については，後に詳述する。）

かう言ふと，聽き誤りによる個別的音韻變化は，日常頻繁に用ゐられる語句には餘り起らないかのやうに見えるが，事實はさう行かない。それらの語句は，なる程早くから度々繰返して聽かされはするけれど，日常頻繁に用ゐられるが故に，兎角無造作に言ひ放され易く，從つてごく不完全に實現される場合が多い。慣れてゐるため，それでも語形は充分把握され得るからである。例へば，ドイツ語の Guten Abend 《gu:tən a:bənt》が〔na:mt〕と發音され，フランス語の s'il vous plaît 《s i vu plɛ》が〔splɛ〕と發音されるが如きはこれである。私が子供の時，出入する御用聞きが皆「サエーン」と言つて歸つて行くので，何のことだらうと疑つて，人に尋ねたところ，「さやうなら」と言つてゐるのだ，と教へられたことがある。この種の語句は，新に言語を習得する小兒にとつては，兎角音韻の誤認や聽き落しが起り易いものと思はれる。卽ち，個別的音韻變化の起る機會となり易い。例へば，ワタクシ(私)がワタシ，ワシとなり，サムラフ(候)がサウラウ，サウ(註2)となり，タマハレ(賜)がタモレ，タモイ，タモと約まつた類は，皆右のやうな機會から起つた音韻變化と思はれる。この種の語句が發音されるに際し，調音の不完全さの程度は人により場合によつてさまざまであらうし，又同じ時代に言語を習得する小兒たちのすべてが全く同じ形に聽き誤るわけでもあるまいから，ワタシとかサウとかいふ風な短縮形は，恐らくやはり若干の個人から起り，模倣によつて他に傳播したものと思はれる。又，事實，言語史の示す所に據れば，この種の短縮形は，その發生當初に於ては，（一般の個別的音韻變化の產物と同樣に，）暫くの間は舊來の長い形と共に二重形として並存し，同一言語社會の中に行はれてゐるのが普通である。

英語に於て，you had better 《ju: hæd betə》は，日常普通には，〔ju:hədbetə〕〔ju:ədbetə〕〔ju:dbetə〕のやうな形で實現されるにとどまら

ず，更に，屢〔ju:betə〕の如く發音され，卽ち，《hæd》の一語が現實の發音の上に少しも實現されないで終つてしまふ事さへ珍しくない。そこで，新にこの句を習得する小兒の中には，この〔ju:betə〕をあたかも《ju: betə》の實現であるかの如く誤認し，そのままの形で記憶するのみならず，この《betə》を動詞と思ひ誤り，《hi: betəz》《hi: betəd》などと活用させる者までも生ずるに至る。(註3)これ亦個別的音韻變化の面白い一例である。

以上は，いづれも聽き誤りから起る個別的音韻變化の例であつたが，個別的音韻變化はまた個人の頭の中に偶然生じた記憶の誤から起ることも有り得る。(註4)記憶の誤，卽ち語形の誤つた再生は，種々なる機會に起り得るものであるが，そのすべての場合に通ずる共通の事情は，語形の總體印象の類似といふ事である。(註5)かうして誤つて記憶された形が，まづ個人の言語意識の中に固定せられ，場合によつては更に廣い社會にも傳播し得ることは，聽き誤りによる個別的音韻變化の場合と同樣である。

次に，所謂言ひ誤りが個別的音韻變化の原因となることについては，多くの學者の注意してゐる所であるが，併し，言ひ誤りは，固よりそれ自身としては單なる一時的偶然的の音聲現象であり，決して音韻變化ではない。それ故，例へば《ʧaŋama》といふ語形をはつきり記憶してゐる人ならば，もしかそれを偶然〔tʃamaŋa〕と言ひ誤つた時には，すぐに〔tʃaŋama〕と言ひ直すであらう。又，たとひ言ひ誤りに氣が付かずに終つたとしても，その次にこの語を用ゐる時には，正しく〔tʃaŋama〕と發音するであらう。又，他人の言ひ誤りを面白がつて模倣する人も無いとは言へないが，模倣された形がそのまま模倣者の言語意識の中に固定されてしまふことが有らうとは思はれない。言ひ誤りがもし音韻變化の原因になり得るとすれば，それは，未だその語を一度も聽いたことの無い人（或は，はつきりと記憶してゐない人）が，たまたま言ひ誤られた形を聽いて，その言ひ誤りであることを知らずに，そのまま記憶してしまふ場合のことである。言葉使ひ

に餘り注意しない社會で，同じ言ひ誤りが幾度も繰り返されるやうな場合には，新に言語を習得する小兒がその誤つた形をそのまま記憶してしまふことは，有り得べきことであらう。さて，この種の所謂「言ひ誤りによる個別的音韻變化」は，結局前に述べた「聽き誤りによる音韻變化」の一種と見ることが出來る。何故なら，聽き誤りの原因となる所の「不完全な發音」と所謂「言ひ誤り」との差異は，畢竟程度の問題に過ぎないからである。例へば，被習得者が《ʂaŋama》を誤つて〔tʃamaŋa〕と發音したのを，習得者が聽いて，それをあたかも《ʂamaŋa》の實現であるかの如く思ひ，その通りの形で記憶してしまつたとすれば，それは明かに一種の「聽き誤り」である。何故なら，この場合話手の意圖する所は元來《ʂaŋama》であつて，それが現實の發音の上に〔tʃamaŋa〕といふ形で現れたのは，話手の意圖せざる所の偶然な心理的原因の干渉によるものに過ぎないからである。音韻的認識とは，音聲の現實に於ける生理的物理的性質を理解することではなくて，話手の意圖，卽ち，話手が如何なる音韻(又は語形)を實現しようとしてその發音運動をなしつつあるのであるか，といふその目的を把握することである。　話手が《ʂaŋama》の積りで發音した〔tʃamaŋa〕といふ形を，聽手があたかも《ʂamaŋa》の實現であるかの如く思ひ誤るといふことは，話手が《ju: hæd betə》の積りで發音した〔ju:bətə〕といふ形を，聽手があたかも《ju: betə》の實現であるかの如く思ひ誤るといふことと，何ら根本的に違ふ所は無い，卽ち，いづれも誤れる音韻的認識，卽ち「聽き誤り」である。而して，「言ひ誤り」の結果が個人の言語意識の中に固定せられ，個別的音韻變化を生ずるためには，必ずこの「聽き誤り」の過程を必要とするのである。

さはさりながら，「不完全な發音」と「言ひ誤り」とを，程度の問題として區別することは，必ずしも無益のことではない。單なる「不完全な發音」の場合には，話手も聽手もその調音の不完全なことを明瞭には意識し

ないのが普通であるけれど，或程度を超えて「言ひ誤り」となれば，話手も聽手もそれを失敗として意識する。從つて，「言ひ誤り」を惹起し易いやうな音韻結合を實現する場合には，話手は言ひ損はないやうに豫め注意を拂ふ傾向がある。それ故，「言ひ誤り」は，いつも單なる一時的偶發的の現象たるにとどまり，決して社會全體の上に一般的に現れることが無い。從つて，所謂「言ひ誤りによる音韻變化」は，通常は，その原因(被習得者の「言ひ誤り」と習得者の「聽き誤り」)及び起原(誤つた形が習得者の言語意識の中に固定されること)を個人に有し，模倣によつて更に廣い社會範圍にも擴り得る所の，個別的音韻變化としてのみ現れる。所謂 Metathesis が，殆ど常にただ個別的音韻變化としてのみ現れ，普遍的音韻變化として現れる例が稀であることも(註6)，この故である。蓋し，Metathesis の原因となる所の，音韻の順序が或心理的原因のために顚倒して實現される現象の如きは，明白な「言ひ誤り」であつて，話手も聽手も直ちにその失敗に氣付くからである。之に反して，「不完全な發音」の方は，無意識の間に發展してその社會全體の上に現れる發音運動の一般的傾向となる場合があり，從つて，時としては普遍的音韻變化の原因ともなり得るものである。

なほ，Metathesis は，「聽き誤りによる音韻變化」の一種である「言ひ誤りによる音韻變化」としてのみ起るものとは限らない。個人の偶然な記憶の誤からも起り得るわけである。一般に，「記憶の誤による音韻變化」は，隣人たちと共通な物理的客觀世界にその原因(例へば，その社會全體の上に現れる發音運動の一般的傾向)を持つこと無く，純粹に個人的な主觀的な原因に基くものである故，普遍的な形で現れること無く，常に個別的音韻變化としてのみ現れるのである。

個別的音韻變化として普通に認められてゐるものは，ラテン語の forpex が forfex に變じたやうな Assimilation や，ラテン語の peregrinus がイタリア語の pellegrino に變じ，ドイツ語の Körder が Köder に變じた

やうな Dissimilation や，ラテン語の ipse が ispe に變じたやうな Metathesis や，ギリシャ語の ἀμφιφορεύς が ἀμφορεύς に變じたやうな Haplologie などであるが，元來個人的に偶然の機會から起る變化であるから，必ずしもこれらの諸型に限られたわけではなく，相互に類似した二種の音韻の一が他によつて置き替へられたり，その語形を把握するための目標として(全形の中に於ける地位の)餘り重要ならざる音韻が脱落したりするやうな音韻現象が，個別的にいくらも起り得るわけである。いづれも，個人の偶然な聽き誤りや記憶の誤から起つて，まづ個人の言語意識の中に固定せられ，然る後，場合によつては，模倣の結果更に廣い社會範圍にも擴り得るものである。かくしてその社會に採用された新しい形は，暫くの間は舊來の形と共に二重形として並存し同一言語社會の中に行はれてゐるが，競爭の結果，やがてはその中の一方は廢れ，一方のみが保存されるやうになるのである。日本語の音韻史上に屢現れる所の，ウ列音とオ列音との入れ替りや，バ行音とマ行音との入れ替りの中には，個別的音韻變化として扱はるべきものが少くはあるまいと思ふ。

右のやうな個別的音韻變化を惹起する所の，語形の聽き誤りや記憶の誤を生ぜしめる原因としては，その語と意義上關係の有る他の語形との聯合關係が重要なものであることは，言ふまでもない。普通に Kontamination と稱せられてゐるのは，卽ちかかる場合を指すものである。例へば，第十七八世紀の交 God b'wy (<God be with you *or* ye) が good-b'wy (goodbye) に變化した事情を考へて見よう。(註 7) 思ふに，God b'wy 《gɔdbai》は，往時挨拶の言葉として極めて頻繁に用ゐられる句であつたため，兎角その發音が粗略になり勝ちであり，その結果，新に言語を習得する小兒たちにとつては，その音聲連續の中に實現せられつつある音韻を一々正當に把握することが困難になり，それをあたかも《gudbai》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶するに至つたものであらう。卽ち，聽

き誤りから起つた個別的音韻變化の一例と考へられる。但し，God に相當する部分を good と聽き誤つたことについては，習得者の頭の中に good day, good morrow, good night のやうな形の聯想されてゐたといふことも，恐らく一つの原因となつたのではなからうか。又，ドイツ語 Essig（古代高地ドイツ語 ezzih）の祖形* atīko は，ラテン語 acētum から出たものであるが，聞き慣れない外來語を記憶し誤つたものか，c (k) と t との位置を取り違へてゐる。卽ち，記憶の誤による個別的音韻變化の一例である。但し，恐らくは，*-īko で終る多くのゲルマン語形との混同が，かやうな Metathesis を起させる機會を與へたものと思はれる。(註 8) Kontamination は，かやうに實際問題として個別的音韻變化と密接な關係を有するのみならず，それ自身の性質に於ても，普通の個別的音韻變化と共通な點が極めて多い。卽ち，兩者共に，個人の偶然な聽き誤りや記憶の誤から起る個別的な語形變化であり，新に發生した形はまづ個人の言語意識の中に固定せられ，時としては模倣によつて更に廣い社會範圍にも擴り，かくして舊來の形と相並んで二重形（Doppelformen）を成し，場合によつては，競爭の結果，つひに舊來の形を壓倒して獨りその言語社會に用ゐられるやうになることも有るのである。兩者の差異點を見ると，まづ，聽き誤りによるものの場合について言へば，普通の個別的音韻變化に於ては，聽き誤りの原因が，多くは話手の發音狀態（「不完全な發音」や「言ひ誤り」）に存する。之に對して，Kontamination に於ては，聽き誤りの原因が，主に聽手の頭の中に旣に存する所の他の語形との混同に在る。然るに，前に引いた goodbye の場合などには，この二つの原因が同時に働いてゐるのである。次に，記憶の誤によるものの場合について言へば，普通の個別的音韻變化に於ても，Kontamination に於ても，記憶の誤を惹起した原因は，共にその個人の頭の中に存する。但し，Kontamination に於ては，記憶の誤を生ぜしめた原因が，他の語形との混同に存する，といふ點にその特色を

有するのみである。

いはゆる通俗的語原意識 (Volksetymologie) に基く語形變化の中には，大體二つの相異なる過程を區別することが出來る。その第一は，例へば，英語の asparagus が sparrowgrass に變つたり，ラテン語の carbunculus がドイツ語に入つて Karfunkel に變つたりするやうな類である。これらは，偶然の聽き誤りや記憶の誤から起る變化であつて，畢竟 Kontamination の過程に外ならない。第二は，例へば，ワタツミがワタツウミに變つたやうな類である。ワタツミは，元來海神を意味する語であるが，時としては直ちに海そのものを指してワタツミと言ふことも有つた。然るに，一方では，例へばアフミノウミ(近江之海)をアフミノミと言ふ風な工合に，ウミ(海)といふ語が他の語の下につく場合に，單にミといふ形になつてゐる例がある。そこで，後世の人は，ワタツミを(本來は海之神(註 9)の意であるのに)あたかも海之海(ワタツミ)の意であるかの如く感ずるに至り(註 10)，つひにワタツウミ(元永本古今集秋下「くさも木も色かはれどもわたつうみも(流布本「わたつ海の」)波の花にぞ秋なかりける」)といふ形を作り出すに至つた。この場合，ワタツウミといふ形の發生は，聽き誤りや記憶の誤によるものではなく，純粹に文法的な手順によるものである(註 11)。その點から見ると，Kontamination には遠くして，寧ろ狹義の類推(所謂 "proportional analogy") に近い性質を持つものである。

音韻の用法變化は，その本質變化とは違ひ，個別的にも現れ得ること，これまで述べた通りであるが，もしその原因及び起原を社會全體に有する場合には，普遍的な形で現れるものである。個別的用法變化の起る機會は既述の通り個人の偶然な聽き誤りや記憶の誤に在るものと考へられるが，もし聽き誤りを生ぜしめる原因がその時代の同一言語社會全體の上に現れてゐる發音上の一般的傾向に在るならば，變化は普遍的のものとなる。例へば，近代英語の初期に於て，語中語末に在り，無聲子音と結合すること

なく，且その直前の母音に强音が置かれない場合には，舊來の《f》《θ》《s》《ks》《ʃ》は，各《v》《ð》《z》《gz》《ʒ》によつて置き替へられた。(註 12)（例へば，pénsif>pénsive, withín>within, desígn>design, exért>exért, knówleche>knówledge の如く。）恐らく，この變化の將に起らうとする時代には，《f》《θ》等の音韻（又は音韻結合）は，かかる條件の下では，極めて不完全に實現されることが多く，實際の發音の上には〔v〕〔ð〕等或はそれに近い形で實現されることが多くなつて來たのであらう。かやうな傾向が次第に强くなり，つひにはその社會全體の上に極めて一般的に現れるに至つたため，この時代に新に言語を習得する小兒たちにとつては，それらの〔v〕〔ð〕等とその他の位置に現れる〔f〕〔θ〕等(音韻觀念《f》《θ》等の實現されたもの）とを同一音韻觀念の實現として認識することが困難になり，且，この條件の下に現れる〔v〕〔ð〕等の中で《f》《θ》等の實現であるものと《v》《ð》等の實現であるものとを辨別することが出來なくなり，結局これら(この條件の下に現れる〔v〕〔ð〕等)を一樣に同一の目的觀念《v》《ð》等の實現として認識し，且そのままの形で記憶するやうになつたものと思はれる。

次に，原始インド語の出氣音韻 (kh, ch, ṭh, th, ph, gh, jh, ḍh, dh, bh) は，同じ音節の終又は次の音節の頭に出氣音韻の來る場合には，すべて無氣音韻 (k, c, ṭ, t, p, g, j, ḍ, d, b) を以て置き替へられた。(註 13)（例へば *dhadhāti>dadhāti) 思ふに，出氣音韻は，いづれもその實現に際して多大の努力(從つて注意)を要するものである。それ故，二つの出氣音韻が相接近した位置に現れる場合には，兩者共に完全に實現されることは甚だむづかしい。その一方に注意を一層多く向ける時は，必ず他方に對する注意が多少怠られる。少しでも注意(努力)がおろそかになれば，出氣音韻の特徵はもはや完全には發揮され難い。それ故，上に述べたやうな條件の下では，出氣音韻は一般に不完全に，比較的弱い出氣音か或は全くの無氣音

の形で實現される傾向が有つたものであらう。この傾向が社會全體を通じて著しくなつたために，その時代に新に言語を習得する小兒たちにとつては，この位置に現れる無氣音の或者が他の位置に於ける出氣音(出氣音韻の實現たるもの)と同じ音韻觀念の實現であることを，正しく認識することが困難になり，且この位置に現れる無氣音の中で無氣音韻の實現であるものと出氣音韻の實現であるものとを辨別することが出來なくなつて，結局これら(この位置に現れる無氣音)を皆一樣に無氣音韻の實現として認識し，且そのままの形で記憶してしまつたものであらう。

近代英語の初期に於て，音韻《b》は，dumb《dumb》lamb《lamb》のやうに語の末尾に在つて《m》に先立たれる場合には，すべて脫落した。(註 14) 思ふに，この變化の將に起らうとする時代には，《b》は，かかる位置では，ごく不完全に短く無破裂に且時としては鼻性を帶びた形で實現され，實際上は殆ど聞えない位のことも多かつたのであらう。かやうな傾向が社會全體を通じて著しくなつたために，その時代に新に言語を習得する小兒たちにとつては，この位置に於て《b》を正しく認識することが困難になり，その結果，被習得者が《dumb》《lamb》の積りで發音してゐる〔dum〕〔lam〕の如き形を，習得者は，あたかも《dum》《lam》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶してしまつたものと考へられる。

中世高地ドイツ語の vîr《fi:r》schûr《ʃu:r》viur《fy:r》は，後には《fa̯ir》《ʃau̯r》《foy̯r》に變化した。然るに，《r》はその實現に際して舌尖を上げ舌面を低下させるので，直前の《ai̯》《au̯》《oy̯》との間にかなり顯著な「わたり」(Gleitlaut) を生じ易く，從つて《fa̯ir》《ʃau̯r》《foy̯r》が實際上〔fai̯ᵊr〕〔ʃau̯ᵊr〕〔foy̯ᵊr〕のやうに發音されたのは當然のことと思はれる。かかる傾向が次第に甚だしくなり，つひには〔fai̯ər〕〔ʃau̯ər〕〔foy̯ər〕のやうな發音が社會全體を通じて行はれるやうになつたため，新に言語を習得する小兒たちは，これらの發音を，もはや單音節語《fa̯ir》《ʃau̯r》

《foy̯r》の實現として認識することが困難になり，あたかも二音節語《fai̯-ər》《ʃau̯-ər》《foy̯-ər》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶するに至つた。ここに近代高地ドイツ語形 Feier, Schauer, Feuer が發生するに至つたのである。Geier, Leier, Speier, Steier ; Auer (ochse), Bauer, Lauer, Mauer, sauer, Trauer ; Abenteuer, heuer, geheuer, Scheuer, Steuer, teuer 等の形も，亦同樣に說明される。(註 15) 卽ち，《ə》は，《ai̯》《au̯》《oy̯》と音節末尾の《r》との間には，規則的に插入されたものである。但し，語の末尾に《ər》といふ音韻結合の立つことは，それ以前から旣に存した所で，決して今新に生じた特色ではない。それ故，この變化は，畢竟，右に述べた三つの例と等しく，普遍的用法變化の一例である。

最後に，個別的及び普遍的用法變化に關する興味ある例を擧げよう。

現代英語に於て，例へば，目的觀念《ænd》(*and*) は，最も完全に實現される場合には〔ænd〕の形で現れるが，稍不完全に實現される場合には〔ǽnd〕の形であらはれ，更に不完全に實現される場合には〔ənd〕〔ən〕〔n〕〔m〕〔ŋ〕等の形で現れる。これ卽ち，所謂 strong form, weak form の對立として一般の音聲學書に記されてゐる事實である。

さて，强音の無い所では，いろいろな母音音韻が，不完全に實現される結果，いづれも〔ə〕類の中性母音として現れて來ることが多い。例へば，米國英語では，and《ænd》は屢〔ənd〕〔ən〕等と發音され，what《hwɑt》は屢〔hwət〕と發音され，was《wɑz》は屢〔wəz〕と發音され，from《frɑm》は屢〔frəm〕と發音され，of《ɑv》は屢〔əv〕と發音される。否，單に屢さう發音されるといふだけのことではない。これらの語の大部分は，强音のある位置に現れることの滅多に無い語であるから，明瞭な强母音を含む形で發音されることはごく稀なのである。卽ち，大抵の場合は〔ə〕を以て發音される。それ故，新に言語を習得する小兒たちにとつては，〔ənd〕の〔ə〕が音韻《æ》の實現であることを正しく認識することが困難である

ため，中にはこの〔ə〕をあたかも《ɑ》の實現であるかの如く誤認し且その通りの形で記憶する者がある。その結果として，《ɑnd》といふ形を用ゐる人が現れて來た。同樣にして，〔hwət〕〔wəz〕〔frəm〕〔əv〕に對する誤認から，《hwʌt》《wʌz》《frʌm》《ʌv》といふ形が出來た。卽ち，いづれも聽き誤りから起つた個別的用法變化の例である。但し，以上の實例は J. S. Kenyon (註 16) に據つた。

次に，古代英語の ān《a:n》ūs《u:s》は，强音の無い位置では，例へば〔an〕〔ɐn〕〔ən〕;〔us〕〔üs〕などの如く，稍不完全に短い形で實現される場合が多かつたものと見える。そのため，新に言語を習得する小兒たちの中には，それらの發音を(被習得者の方では《a:n》《u:s》の積りで發音してゐるのに)あたかも《an》《us》の實現であるかの如く誤認し，且その通りの形で記憶する者が現れて來た。中世英語の《an》《us》はこの系統の形であり，現代英語の《æn》《ʌs》もそれから出たものである。もつとも，《a:n》は，「一つ」といふ數觀念を明瞭に現す場合には，いつも强く〔a:n〕と發音されたので，この場合には一般に正しく《a:n》の實現として認識された。中世英語の《ɔ:n》はこの系統の形であり，現代英語の《wʌn》もそれから出たものである。(註 17)

右の場合，《a:n》《u:s》から《an》《us》への推移を，《a:n→a'n→an》《u:s→u's→us》の如く漸次的に短縮し來つたものと考へてはならない。事實は，《a:n》《u:s》から《an》《us》へ直ちに跳躍したのである。古代英語の音韻體系が，音の長さの種類として，長・短二つの範疇以外に，特に半長といふものを區別してゐたといふ形跡は，少しも存在しないのである。勿論，實際の發音の上には，半長程度の長さの母音は，いくらも現れて來たらう。併し，その種の母音と雖も，音韻的意圖の上から言へば，當然長・短二つの範疇の中の何れかを目ざして發音されたものと考へなければならない。

同様に，近代英語の初期に於ては，have《ha:v》are《a:r》were《we:r》等の語形は，强音の無い位置では，例へば〔hav〕〔hɐv〕〔həv〕;〔ar〕〔ɐr〕〔ər〕;〔wer〕〔wër〕〔wər〕などの如く，稍不完全に，短い形で實現される場合が多かつたものと見える。そのため，新に言語を習得する小兒たちの中には，それらの發音を(被習得者の方では《ha:v》《a:r》《we:r》の積りで發音してゐるのに)あたかも《hav》《ar》《wer》の實現であるかの如く誤認し，且その通りの形で記憶する者が現れて來た。かくして發生した《hav》《ar》《wer》の形は，卽ち現代英語の形《hæv》《a:》《wə:》の先祖である。なほ，《we:r》の系統の形も現代英語に《wɛə》として保存されてゐる。(註18)

前にも述べた通り，近代英語の初期に於て，弱い母音の次にある《f》《θ》《s》等は，無聲子音に先立つ場合の外，一般に《v》《ð》《z》等を以て置き替へられた。かかる音韻取替の將に起らうとする時代には，この條件の下に於ては《f》《θ》《s》等は甚だ不完全に實現される傾向が强く，《v》《ð》《z》等との區別がおろそかになつて，實際上〔v〕〔ð〕〔z〕等或はそれに近い形で實現されることが多くなつたのであらう。ところで，of《of》if《if》with《wiθ》is《is》his《his》has《has》was《was》as《as》us《us》等の語は，强音を持たないことが多いため，無聲音韻で始る語に先立つ場合の外は，恐らく〔öv̥〕〔əv〕;〔iv̥〕〔iv〕;〔wið̥〕〔wið〕;〔iz̥〕〔iz〕;〔hiz̥〕〔hiz〕;〔hɐz̥〕〔həz〕;〔wɐz̥〕〔wəz〕;〔ɐz̥〕〔əz〕;〔üz̥〕〔əz〕のやうな形で實現されることが多かつたものと思はれる。かかる傾向が社會全體を通じて一般的なものとなつたため，その時代に新に言語を習得する小兒たちにとつては，それらの形を，無聲音韻で始る語に先立つ場合に現れる形〔öf〕〔əf〕;〔if〕;〔wiθ〕;〔is〕;〔his〕;〔hɐs〕〔həs〕;〔wɐs〕〔wəs〕;〔ɐs〕〔əs〕;〔üs〕〔əs〕等，及び稀に强音を持つ場合に現れる形〔of〕;〔if〕;〔wiθ〕;〔is〕;〔his〕;〔has〕;〔was〕;〔as〕;〔us〕等と，同一目的觀念の實現として認識すること

が困難になり，その結果，後者を《of》《if》《wiθ》《is》《his》《has》《was》《as》《us》の實現として正しく認識したのに對し，前者をば，あたかもそれとは異なる語形《ov》《iv》《wið》《iz》《hiz》《haz》《waz》《az》《uz》の實現であるかの如く誤認し，且その通りの形で記憶するに至つた。かくして新しく發生した形《ov》《iv》《wið》《iz》《hiz》《haz》《waz》《az》《uz》と，舊來の形《of》《if》《wiθ》《is》《his》《has》《was》《as》《us》とは，暫くの間は混用されてゐたやうであるが，競爭の結果，後には專ら一方の形のみが用ゐられるやうになつた。現代英語の形《ɔv》《if》《wið》《iz》《hiz》《hæz》《wɔz》《æz》《ʌs》は，各《ov》《if》《wið》《iz》《hiz》《haz》《waz》《az》《us》の系統を引くものである。但し，《of》の系統の形はoff《ɔ:f》として現今殘つてゐるし，方言によつては現に《iv》《wiθ》《uz》などの系統の形を使用してゐるものもある。(註 19)

右の場合，例へば《of》《has》等から《ov》《haz》等への推移を，《of→ov̥→ov》《has→haz̥→haz》のやうな漸次的變化と考へてはならない。事實は，《of》《has》等から《ov》《haz》等へ直ちに跳躍したのである，初期近代英語の音韻體系が，《f》《v》以外に特に《v̥》といふ音韻を區別してゐたといふ形跡は，少しも存在しない。又，《s》《z》以外に特に《z̥》といふ音韻を區別してゐたといふ形跡は，少しも存在しないのである。

同樣に，例へば，近代日本語に於ける，イラセラルからイラッシャルへの推移を，《iraʃera—》→《iraʃra—》→《iraʃr̥a—》→《iraTʃa—》(註 20)の如き漸次的變化と考へるならば，それは大きな誤である。近代日本語の音韻體系が，《r》の外にかつて《r̥》といふ音韻を區別してゐた形跡は少しも存在せず，又かつて《ʃr》の如き音韻結合を許容したといふ形跡も全く認められない。事實は，《iraʃera—》から《iraTʃa—》へ直ちに跳躍したのである。つまり，《iraʃera—》は，往時極めて頻繁に用ゐられる語形であつたから，兎角その發音が粗略になり易く，從つて，〔iraʃera—〕の如く完全に實現されるこ

とは寧ろ稀であり，普通には〔iraʃra—〕とか〔iraʃra—〕とか〔iraʃʃa—〕とかいふ風に粗略に不完全に實現される場合が多かつたものと思はれる。就中〔iraʃʃa—〕に近い發音が屢聽かれたため，新にこの語を習得する小兒たちの中の或者は，この發音を(被習得者の方では《iraʃera—》の積りで發音してゐるのに)あたかも《iraɾʃa—》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶してしまつたので，ここに《iraɾʃa—》といふ形が發生するに至つたものと考へられるのである。

一體，音韻の用法變化は(普遍的たると個別的たるとを問はず)，漸次的に生ずるものではなくして，その本性上，常に跳躍現象として現れる。卽ち，甲音韻から乙音韻への突發的(非連續的)移轉である。音韻の本質變化の中でも，音韻の消滅及び新音韻の發生(音韻狀態の舊態と新態との對應關係の見地から言へば，音韻の合同及び分化)の如きは，やはり一の跳躍現象である。(註21)

もつとも，その跳躍の程度の大小は，普遍的音韻變化の場合と個別的音韻變化の場合とによつて稍事情を異にしてゐる。抑，一定の音韻が現實の發音運動の上に實現されるに際し，その實現の完全不完全の程度は，場合によつて種々さまざまである。併し，それにしても，發音が餘り粗略になり不完全になる時は，つひには言語の理解に支障を生ずるに至る。つまり，話手が如何なる音韻(又は語形)を實現しようとしてその發音運動をなしつつあるのであるか，といふその目的を，聽手に正しく把握させることが困難になつて來るのである。これでは困る。然らば音韻は大體どの程度まで完全に實現されなければならないのか，といふと，それはその場合々々の事情によつて變つて來るのである。例へば，滅多に聞かれないやうな人名地名或は時日や電話番號などを聽手に正しく記憶させる必要がある場合などには，その語形に含まれた一つ一つの音韻を發音運動の上に出來るだけ完全に實現して聽かせなければならない。之に反して，日常ごく普通に慣

用されてゐる挨拶の語句などは，ごく粗略に發音するだけでも，充分相手に理解される。例へば，Guten Morgen！《gu:tən mərjən》は〔gmɔīn〕或は〔gmõ〕と發音すれば充分分るし，Guten Abend！《gu:tən a:bənt》は〔na:mt〕で結構事足るのである。又，發音の完全不完全は，その場合の事情一般により，話全體の調子によつて，餘程變つて來る。例へば，雜談の際の發音は，講義の際の發音に比すれば，概して粗略なものである。而して，話全體の調子が比較的丁寧である場合，その中に出て來る一二の音韻をのみ特に粗略に發音するならば，語形の把握を甚だしく困難ならしめる。卽ち，發音の完全不完全の程度は，その場合の話全體の調子とよく調和してゐなければならない。次に，言葉を一體に丁寧に發音するか粗略に發音するかについては，個人々々大體きまつた癖がある。それと同樣に，一定の時代の一定の社會全體についても，自ら獨特の傾向が認められるわけである。或社會では一般に發音が丁寧であるとか，又或社會では一般に發音が粗略であるとかいふ風な工合に。これは，それぞれの民族の特性が違ひ，それぞれの時代の指導精神が違ひ，それぞれの社會の生活狀態が異なるにつれて，當然起るべき事實である。又，發音運動の一般的傾向についてかかることが言はれるのみならず，個々の發音器官の働き方についても，やはり一つ一つの社會，一つ一つの時代に，各獨特の傾向が認められる。例へば，或社會では，脣の働きが，他の社會に比して兎角粗略になり易い，といふ風な工合に。又，音韻觀念の實現に際して，それに先行する音韻の影響を受け易いか，それとも後續する音韻の影響を一層容易に受け易いか，といふことについても，各地各時代の社會にはそれぞれ獨特の傾向で存在する筈である。かやうに，發音運動に於て，各地各時代の社會にそれぞれ獨特の傾向が存在すればこそ，その結果として，各地各時代の社會にそれぞれ獨特の音韻變化が起るやうになるのである。

右のやうなわけであるから，各音韻が實現されるに際し，現實の發音の

上に現れる外形上の多樣さは，それぞれの時代それぞれの社會によつて，程度がいろいろ違つてゐる。この多樣さの範圍を，假に實現範圍と呼ぶならば，相類似せる二つの音韻の實現範圍は，決して一定の境界線によつて劃せられてゐるわけではなく，雙方の領域の莫大な部分が相重なつてゐるのが普通である。例へば，「然うかい」《sookai》の《i》は，「樺」《kejaki》の《e》よりも一層開いた形で實現されることが珍しくない。又，英語では，《i》《e》《æ》《a:》《ɔ》《ɔ:》《ʌ》《u:》《ə:》等いろいろな音韻が，强音の無い位置では皆一樣に〔ə〕類の音聲として實現される。次に，音韻の實現範圍の大小は，固より，話手の個性によつても違ひ，場合によつても違ふ。例へば，冷靜な人と性急な人とによつても違ふであらうし，慎み深い人と無頓着な人とによつても違ふであらう。又，狼狽してゐる時や，疲勞してゐる時や，寢呆けてゐる時や，酩酊してゐる時などには，正常な狀態に在る場合に比して，實現範圍が概して大きくなつてゐるわけである。併しながら，或時代の或社會全體について見るならば，そこには自ら，最も普通な平均的な實現範圍といふものが，社會的に略定まつてゐるものである。もつとも，この平均的實現範圍そのものは，F. de Saussure 流の用語で言へば，langue ではなくして，單に，parole に屬するものに過ぎず，何らそれ自身として規範性を持つものではない。又，事實，極めて漠然たる不確定なものである。ただ，その社會全體を通じて，發音が比較的丁寧であるとか，比較的亂暴であるとかいふ風な一般的傾向は，自ら定まつてゐるものであるから，普通一般の習慣を超えて極端に粗略な發音をする時は，聽手にとつては實に思ひまうけぬ出來事であるから，話手が一體何音韻を實現しようとしてその發音運動をなしつつあるのであるか，といふその目的を把握することが困難になる。卽ち，正當な音韻的認識が困難になるのである。畢竟，前に述べた所の「發音の完全不完全の程度は，その場合の話全體の調子とよく調和してゐなければならない。」といふ原理

が，一層廣い意味に於て，この場合にもあてはまるのである。つまり，發音の丁寧さ粗略さの程度は，常に，その場合に於ける話全體，或は社會全體の調子と，よく調和してゐなければならない。然らずば，その發音運動の意味(目的・理想)の把握を困難ならしめる。これは話手にとつては甚だ好ましからざることであるから，誰も皆さやうなことの無いやうに努力する。音韻の平均的實現範圍ともいふべきものが社會的に大體定まつて來るといふことは，かくの如き事情から起る自然の結果に過ぎない。決して平均的實現範圍そのものが規範性を持つわけではないのである。故に，日常頻繁に用ゐられる慣用の語句などの場合には，平均的實現範圍を遙かに超えた粗略な發音を用ゐても，結構用を辨ずることが出來る。その他，その場合々々の事情に應じ，平均的實現範圍を超えた粗略な發音が用ゐられ，而もそれで充分用が足り，特に發音の粗略であつたといふことすら少しも氣づかれずに終つてしまふやうなことも，日常談話の際には珍しくはないのである。

さて，音韻の用法變化一般，及び音韻の合同や分化のやうな現象が，いづれも一種の跳躍現象であることは，既に述べた通りであるが，その跳躍の程度は，場合によつてさまざまである。普遍的音韻變化の際には，その原因となるものが，當時の社會全體の上に現れてゐる發音運動の一般的傾向であり，その一般的傾向といふものは，當然その原音韻の平均的實現範圍の中に現れてゐるものでなければならないから，普遍的音韻變化の形で起る跳躍の程度は，自ら原音韻の平均的實現範圍によつて制限されてゐる。故に，その跳躍は，非常に大きなものではあり得ない。之に反して，個別的音韻變化は，元來個人の一時的偶然的な聽き誤りや記憶の誤から生ずるものであるから，跳躍の程度については右の如き制限が無い。その原因は，社會全體を通じての一般的現象たることを要せず，却つて個人的一時的偶然的のものである。聽き誤りの原因となる「不完全な發音」について言へ

ば，平均的實現範圍を遙かに超えた程度のものでさへも(所謂「言ひ誤り」でさへも)個別的音韻變化の原因とはなり得るのである。故に，その結果として起る個別的音韻變化は，時としてはかなり思ひ切つた大跳躍である場合も有るのである。

次に，「個別的音韻變化や Kontamination の結果として，その言語の在來の音韻制度の特色と一致しないやうな形の發生することは，有り得るかどうか。」ここに音韻制度と稱するものは，音韻の種類に關する規定を始めとして，音節(觀念的理想的意味に於ける)や音韻論的完結體の構造に關する規定，語や語根の構造に關する規定等を含む所の，廣義の音韻制度を意味するものである。總じて言へば，「個別的音韻變化や Kontamination は，既存の音韻制度を破らない。」と言ふことが出來る。何故なら，語形 abc をあたかも語形 aec であるかの如く聽き誤り，或はその如く記憶し誤つたものとせば，その當人にとつて，語形 aec といふものが，如何にもその言語に有りさうな語形である，と思はれたればこそ，かうした誤聽や誤記憶も起り得たのである。もしも，aec といふ形が，その言語の音韻制度の上から見て到底有り得べからざる形であつたとすれば，語形 abc をあたかも aec であるかの如く聽き誤り，或はその如く記憶し誤るなどといふことは，決して起り得ないことである。例へば，O. Jespersen に據れば，「children といふ語は，特に注意すべきものである。〔ʃ〕の音や調音法は多少〔i〕に似てゐるので，〔i〕は〔ʃ〕に吸收され，或は寧ろ〔ʃ〕の位置から〔l〕の位置へ急速に移るのに入用な最短路にまで縮められる傾向がある。この傾向は，〔l〕が，音長の諸法則(註 22)に從つて此の場合長く發音されるため，音節の頂點たるにふさはしい母音的な響を持つてゐる事實により，一層助長される。さうして生じて來る〔tʃ(i)ldrən〕又は〔tʃ(j)ldrən〕に於ては，その〔i〕や〔j〕の要素よりも，〔l〕の持つ〔u〕類似の性質の方が，ずつと優勢になつてゐる。そこで，すべて强音節には母音が有るものと期待

する習慣のある耳には，右のやうな音聲結合は〔tʃuldrən〕の如く知覺され，かくて，この語は，新しい世代の人々によつて，本當の〔u〕を持つ〔tʃuldrən〕といふ形で模倣されるやうになる。この發音は，殊に婦人や小兒に多いやうである。Sweet は此の語をいつも〔tʃuldrən〕と轉寫してゐる。」(Modern English Grammar, Part I, 3. ed., pp. 409—410.)イギリスの小兒たちは，大人が《ˈʧild—》を〔ˈtʃld—〕と發音するのを聽いても，決してそれを《ˈʧld—》の實現であるかのやうに誤認する筈は無い。彼等の母國語には，母音音韻を含まない强音節の有る筈が無いからである。そこで，彼等は，この〔ˈtʃld—〕を語形《ˈʧuld—》の實現であらうと想像し，その通りの形で記憶したのである。

併しながら，この問題については，なほ一層深く考究することが必要である。なる程，個別的音韻變化や Kontamination によつて，新しい音韻の生み出されることの無いことは事實であらう。又，それらによつて，音節(觀念的理想的意味に於ける)の構造に關する制限の上に根本的な變化の起ることも，到底有り得ない。かくの如き大變革のなしとげられるためには，必ず社會全體(少くともその社會に屬する人々の大多數)の協力を必要とする筈である。個人の偶然な聽き誤りや記憶の誤から起る所の，個別的音韻變化や Kontamination が，かかる大變革を伴ふ筈は決して無い。然るに，音韻の現れる位置に關する規定などになると，果して常にそれが絶對に動かすべからざる規定であるかどうかは，大いに疑問である。第一，その束縛感の强さには，いろいろな程度がある。例へば，現代の東京方言の音韻制度は《je》《wi》《nwa》《wra》の如き音韻結合を許容しない。これらの結合は，一般に，特別の訓練を經なければ發音することがむづかしく，從つて，これらの規則は，單なる個別的音韻變化や Kontamination などによつて容易に破らるべきものとも見えない。然るに，《g》は文節の頭以外の位置には立ち得ない，といふ制限の如きは，比較的寬かなもので

ある。多くの人は，文節內部 (Inlaut) で《g》を發音することについて，何らの困難をも感じない。(註 23) 而して，現今，右の制限に對しては既に若干の例外を生じてゐる。例へば，十五・二十五・第五課・日本銀行・山牛蒡・靜御前・ゲヂゲヂ・ガラガラなどのやうな場合には，文節內部でも《g》を用ゐる。又，近代英語の初期に於て，弱い母音音韻に先立たれ且母音音韻の前に立つ《s》は，すべて《z》に變化した。故に，この變化の起つた直後には，英語の音韻制度は，(少くとも原則として)弱い母音音韻に先立たれ且母音音韻の前に立つ《s》といふものを持たなかつたわけである。然るに，この制限は，現代の英語では既に撤廢されてゐる。さらば如何にしてこの制限が破られたかと言へばその主要な原因が，後世類推(廣義)によつて新しい形の發生したことに存する，といふことは，諸家の意見の一致する所である。例へば，disáble はかつて《z》を持つてゐたが，dìsabílity, dìsagrée, displéase などの影響により，後世《s》を以て置き替へられた。又，phìlosóphic もかつては《z》を持つてゐたが，philósophy, philósopher, sóphist などの影響により，後世《s》を以て置き替へられた(註 24)といふ。この種の新しい形の發生した次第は，結局，誰かが本來の形を聽き誤り，讀み誤り，或は記憶し誤つて，その結果その誤つた形がそのまま當人の言語意識の中に固定され，更に模倣によつて一層廣い社會範圍にも傳播するに至つたものと考へなければならない。然らば，普遍的音韻變化の結果生じた「音韻の現れる位置に關する制限」も，場合によつては案外のんきに看過され，本來の制限に無頓着な，聽き誤りや讀み誤りや記憶の誤も起り得るものと見える。否，その制限は，外形的にこそこれら新しい語形の發生によつて始めて破られたのであるけれど，制限意識・束縛意識はそれ以前から既に失はれてゐたものと考へなければならない。既に制限とも束縛とも何とも感ぜられないやうになつてゐたればこそ，かやうな聽き誤りや讀み誤りや記憶の誤も，遠慮無く起り得たのである。新しく出來る形が，當時

の音韻制度に背くものと明瞭に感ぜられたものとせば，語形がこんな形に聽き誤られたり讀み誤られたり記憶し誤られたりする筈は無い。故に，音韻の現れる位置に關する外形上の制限は，必ずしも常に實際の言語意識上に嚴格な制限感・束縛感を伴ふものとは限らないやうに思はれるのである。(註 25)

而して，既述の「個別的音韻變化や Kontamination は，既存の音韻制度を破らない。」といふ原則は，その「音韻制度」をして，實際の言語意識上の明瞭な制限感・束縛感を意味せしめるならば，大體常に眞理と認めてよからうと思ふ。

**註**（1）多くの日本人が，自分のアクセントの正不正にかなり無頓着であることなどを思ひ合すべきである。

（2）湯澤幸吉郎氏著「室町時代の言語研究」（昭和四年）168—170 頁參照。

（3）L. Soames: The Teacher's Manual, Part I, The Sounds of English, 2. ed., 1913, p. 58.

（4）これは勿論餘り一般的ならぬ語や新語などに多い。日本人に於ては，殊にアクセントの記憶などにはいい加減な場合がある。

（5）ステイションをステンショと言つたり，ココロテイ（心太）をトコロテンに變じたりする類は，何れも多分全體印象の類似から來る記憶の誤によるものであらう。併し，これらと同樣の事情は，極めて一般的に認められる所である。

（6）ラテン語の paria, moriat, dormitōrium がフランス語の paire, muire, dortoir に變じたのは，例へば paria>*par'a>*par'e>paire のやうに，まづ r が口蓋化されて，然る後にその r' の口蓋性が直前の母音にも影響し，之を二重母音化したものである (W. Meyer-Lübke: Historische Grammatik der französischen Sprache, I., 4. und 5. durchgesehene Auflage, 1934, S. 146 f.)。ギリシャ語の *φανϊω, *σπαρϊω, *μορϊα が φαίνω, σπαίρω, μοῖρα に變じた過程も，やはり同じことと考へられる (K. Brugmann: Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, anastatischer Neudruck, 1922, S. 224 f.)。アイルランド語にもこれらと類似の變化がある。例へば，原始インドゲルマン語 *wātis から古代アイルランド語 fáith が出で，原始インドゲルマン語 *r̥tus 原始アイルランド語* riþus から古代アイルランド語 riuth が出た。これ亦，まづ，兩母音に挾まれた子音が，後の母音の影響により口蓋化又は圓脣化されて，然る後にその影響が前の母音にも及んだものと考へられる (J. Pokorny: Altirische Grammatik, 1925, S. 7 u. 18.)。これらは，所謂 Epenthese であつて，眞の Metathesis とは違ふ。

原始スラヴ語の tj に對應する音は，ブルガリア語（古代教會スラヴ語を含む）

では，t′, t′š を經て štʹ, šť に變化した。例へば原始スラヴ語 *světja ロシア語 svěča ブルガリア語 svěšta の如く。この變化は，W. Vondrák の說では，*svět′ša>*svěšt′ša>*svěšt′a>svěšta のやうな順序で起つたものとして說明されてゐる (Vergleichende slavische Grammatik, I. Band, 1906, S. 275 f.)。

少くとも結果に於てこれとよく似た變化は，フランスの一部の方言に起つてゐる。卽ち，現代標準フランス語の š (chanta の ch) は中世フランス語の tš から出たものであるが，この tš はフランス中部から東部へかけての諸方言では ts に變化して居り，又その中の一部の方言では此の ts が更に st に變つてゐる。tsanta, stanta の如く (A. Dauzat: La géographie linguistique, 1922, pp. 174—176.)。又，K. Brugmann 等に據れば，古代ギリシャ語でも，これと同樣な變化が起つたといふことである。例へば，ギリシャ語の Ζεύς は，古代インド語の dyāúṣ と關係のある語であり，かつては dzeús のやうな形であつたものと想像されるが，古典時代の Attika 方言では zdeús と發音されてゐた (Brugmann 前揭書 S. 93 f.)。現に，古代の Attika の瓶には，Ζεύς を Σδεύς と綴つた例がある。

さて，此のフランス語やギリシャ語の例が，前のブルガリア語の場合と同樣な過程 (ts>sts>st, dz>zdz>zd) によつて生じたものであることは，可能なことである。但し，何れにしても，この種の變化は眞の Metathesis とは言へない。何故なら，これらの場合 ʦ, ʤ は各單一な音韻であり，從つて ʦ, ʤ が s-t, z-d に變化することは決して音韻の位置の轉換とは言へないからである。これは，前のブルガリア語の例についても同じことである。

次に，原始インドゲルマン語の *dṛbh-tos が *dṛbdhos (古代インド語 dṛbdhás; 現在形は dṛbháti) に變じた類の現象については，Brugmann は之を Metathesis の中に數へてゐるけれど(前揭書 S. 246.) 此の說は當つてゐない。何故なら，bɦ, dɦ は各單一な音韻であつて，その h は獨立の音韻とは見做されないからである。さて，bɦ や dɦ の h 要素は，古代の文法家の說では，古代インド語の獨立の h 卽ち 〔ɦ〕 と同一視されてゐる。bɦ, dɦ の h 要素が 〔f〕 類の音であつたものとすれば，その b, d 要素とても完全な有聲音であつたものとは考へられず，恐らくやはり 〔ɦ〕 類の粗い聲帶振動を以て發せられたものと思はれる。否，これらの音韻の主體たる b, d 要素が 〔ɦ〕 類の聲門狀態を本質的屬性としてゐたればこそ，その "off-glide" にも自然 〔ɦ〕 類の音が現れて來たものと考へられるのである。然らば，音韻 bɦ の直後に音韻 t が續く場合，後者の聲門狀態が前者に同化される結果，t が dɦ に變ずることは，極めて自然な現象と言ふべきである。併しながら，口的閉鎖音韻に於ける聲門狀態の特色が最も明瞭に聽取される所はその "off-glide" に在るので，その "off-glide" が發音上に現れない場合には，音韻 bɦ, dɦ は，聽覺上，音韻 b, d から區別されることが甚だ困難になる。然るに，二個の閉鎖音韻が相連續

する場合には，その第一音韻の "off-glide" は，發音上に全然現れないか，又は極めて短く不明瞭にしか現れないのを例とするので，t 又は d̄h の直前に立つ音韻 b̄h が，聽覺上，音韻 b に似て聞えたことは當然である。然らば，かやうな位置に立つ音韻 b̄h が，新に言語を習得する小兒たちによつて，あたかも音韻 b であるかの如く誤認され，その結果 b̄h→b の音韻變化が起るといふことは，有り得べきことと考へられる。右の音韻變化が，果して b̄ht→b̄hd̄h→bd̄h の順序によつて起つたものであるか，それとも b̄ht から直接 bd̄h に變化したものであるかは明かでないが，何れにしても眞の Metathesis ではないのである。

之を要するに，大體普遍的音韻變化として起つた所の以上の諸例は，その過程を辿つて見れば，何れも眞の Metathesis ではない。

併し，古代のアルメニア語に於て，本來の「子音プラス r」が「r プラス子音」の形に變化した事實の如きは，眞の Metathesis と思はれる。ところが，M. Grammont に據れば，「この公式を支持するために引用し得る實例は餘り多くはないが，併し此の公式は何らの例外をも許容しない。」(La métatèse en arménien——Mélanges de linguistique offerts à M. Ferdinand de Saussure, 1908, pp. 231—243.) といふことである。例へば，

rt<tr artasukh ⟪larmes⟫, cf. vha. trahan ; khirtn ⟪sueur⟫, cf. gr. ἱδρως.

rk<kr erkan⟪meule à broyer⟫, cf. sk. grāvā.

rb<br ełbayr ⟪frère⟫, cf. sk. bhrātā; ałbewr ⟪source⟫, cf. gr. φρέαρ ; surb ⟪pur, saint⟫, cf. sk. çubhráḥ.

rs<sr aṙu ⟪canal⟫, cf. sk. srutíḥ ; kher ⟪de la sœur⟫ cf. sk. svásre.

但し，この最後の二つの例の ṙ は，rs>rš> ṙ と變化し來つたものであるといふ。Grammont の引いてゐる例は此の八つだけであるが，もしこの變化が，これらの例以外に於ても，相當多數の語に亙つて規則的に起つたものとすれば，世界の音韻史上に珍しい事實と言はなければならない。

(7)　詳しくは A New English Dictionary を參照せられたし。

(8)　L. Bloomfield : An Introduction to the Study of Language (舊版), p. 283 に據る。

(9)　山の神をヤマツミと言ふのと同じことである。

(10)　萬葉集では，ワタツミは，多くは海神・海若のやうな文字で表されてゐるが，既に渡津海・綿津海・方便海のやうな文字を用ゐた例もある。

(11)　卑俗ラテン語 lauribaca, lusciniolu, lyncea がイクリア語の orbacca, usignuolo, onza に變じたのは，それらの頭音 l が冠詞の l' と誤解されたためである。英語の naddre, napron, nauger, numpire が adder, apron, auger, umpire に變じたのは，例へば a napron が an apron と解せられ

るが如き，誤つた分析の結果である。又，逆に，ewt が newt に變じたのは，an ewt が a newt の如く誤つて分析された結果である。これらも，ワタツミがワタツウミに變じたのと類似の性質を有する變化である。

(12) O. Jespersen: A Modern English Grammar, Part I, 3. ed., 1922, pp. 199—208.

(13) K. Brugmann: Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, anastatischer Neudruck, 1922, S. 181 f.

(14) Jespersen 前掲書 (註 12) pp. 216—217.

(15) H. Paul: Deutsche Grammatik, Band I, 1916, S. 246.

(16) J. S. Kenyon: American Pronunciation, 1924, pp. 157—158.

(17) H. Sweet: A New English Grammar, Logical and Historical, Part I, 1900, pp. 335 and 352.

Jespersen 前掲書 (註 12) p. 130.

(18) Jespersen 前掲書 (註 12) pp. 129—130.

(19) Jespersen 前掲書 (註 12) pp. 200—202.

(20) 假に《T》を以て促音音韻を表す。

(21) R. Jakobson: Prinzipien der historischen Phonologie (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1934), S. 249—250 の所說と比較せられたし。Jakobson は，かくの如き跳躍現象のみを音韻變化と認め，然らざるものは之を單なる音聲上の變化となす。私は，之に反して，音韻變化の中には漸次的變化も有るものと認める。これは，兩者の音韻觀の根本的相違によるものである。卽ち，前者は單に音韻の機能や價値のみを問題とし，後者は，それが社會的規範として强制力を持つ限りに於て，音韻の實質方面をも問題とする。

(22) 同書 449 頁に，build, mend のやうに有聲子音の前に立つ〔l, n〕は，built, meant のやうに無聲子音の前に立つ〔l, n〕よりも長い，といふことが記されてゐる。

(23) 我々にとつて，《g》を文節の中程で發音することは，《ŋ》を文節の頭で發音することに比べれば，寧ろ容易であるやうに感ぜられる。蓋し，東京の言語制度に於ては，《ŋ》は，文節の頭に立ち得ないのみならず，一般に音韻論的完結體の頭には立つことが出來ない。之に反して，《g》は，文節の中程に立つことこそ(原則として)不可能であるが，一般に音韻論的完結體の中程に立つことが禁止されてゐるわけではない。例へば，「私の學校」とか「みんな元氣だ」とかいふ風な文句の中程には，《g》はいくらも立ち得るのである。それ故，さやうな場合の《g》の發音法を移して，文節の中程で《g》を發音するとすれば，それは甚だしく困難な仕事ではない。

又，B. Trnka に據れば，pt, kt のやうな音韻結合を含む形態部 (morpheme) は，本來の英語には無いのに，イギリス人はそれらの音韻結合を含む形態部 (sept, sect の如き)を外國語から借入して，而もそれらに何の變形を

も加へず，平氣で之を使用してゐる。何故こんなことが可能であるかと言へば，本來の英語では，pt, kt の如き音韻結合は，同一形態部の中にこそ存在しないが，dipped〔dipt〕licked〔likt〕の場合のやうに，二つの形態部の接合する所には出て來るので，さやうな場合に於ける末尾の pt, kt の發音法を移して，外來語 sept, sect 等に應用すれば，それらをも容易に發音し得たものであらう。もしかかる事情が本來の英語に存在しなかつたとすれば，あたかも ptarmigan を〔ta:migən〕mnemonic を〔ni'monik〕と發音するのと同じやうな工合に，sept や sect の pt, kt も簡略化されてしまつたであらう (General laws of phonemic combinations——Travaux du Cercle Linguistique de Prague 6, 1936——pp. 60—61.) と。

之を要するに，一口に「音韻の現れる位置に關する制限」と言ふものの中でも，音韻の直接的機能（音節や音韻論的完結體の構成）に關するものは，音韻の間接的機能（文節や語や形態部の統成）に關するものに比べて，一層堅固であり，容易に破られ難いやうに見える。蓋し，前者は各言語に於ける發音上の一般的習慣と直接不可分の關係を持ち，習ひ性となつて殆ど動かし難いものとなつてゐるからである。之に對して，後者は，前者の許容する範圍内では，比較的容易に破られ得るものである。

(24)　Jespersen 前掲書（註 12）pp. 203—204.

(25)　然らば，音韻の現れる位置に關する外形上の制限の中で，如何なるものが，實際の言語意識上に嚴格な制限感・束縛感を伴ふのであらうか。之については，註 23 に於ても多少述べたが，なほ研究を要する所である。それには，Trnka の前掲論文（註 23）などは大いに參考となる。例へば，氏が多くの言語から歸納した諸法則の中に「語頭又は語末に現れる子音結合は，母音と母音との間にも用ゐられ得る可能性がある。併し，その逆は必ずしも成立たない。（英語に於ける pl, kl, kw を mp, mb, lp, lb と比較せよ。）」(p. 61) といふものが有る。そこで，今假に，或言語に於て，語頭に pl, kl, kw の實例が有り，語中の母音間に kl, kw の實例が有りながら，語中の母音間に pl の實例が偶然一つも無かつたものとする。かやうな場合には，恐らく，「語中の母音間には pl は現れない。」といふ外形上の制限は，實際の言語意識の上に嚴格な制限感・束縛感を伴ふことは無いであらう。

## 三

私は，前に第一章に於て次のやうに述べた。「同時代の人々の中でも，老人の音韻狀態と，若い人々の音韻狀態とは，稍ちがふ筈である。卽ち，同一言語社會に於ける音韻狀態と雖も，嚴密に等質的なものではなく，幾分むらがあるわけである。」と。この言葉は，或人々に對しては，少し異樣に響くかも知れない。卽ち，「音韻は，元來個人によつて違ふべき筈のものではなく，社會全體の共有でなければならない。つまり，同一時代の同一社會には，必ず唯一つの音韻體系が存するのみである。二樣三樣の音韻狀態が存在し得ると言ふが如きは，それ自身矛盾した言である。」と考へられるであらう。そこで，この點を明かにするために，音韻體系と類似の性質を持つてゐる他の一の社會的規範，卽ち道德について少しく考察して見よう。道德は，その根源に於ては人類の本質に根ざしてゐるものであらうが，我々が現實に持つ道德意識に於ては，久しい間の社會的訓練によつて獲得された要素が非常に重要な意味を持つてゐるが故に，之を一箇の社會的規範として見得ることについては，何人も異論の無い所であらうと思ふ。さて，普通に「道德的規範」と稱せられるものの中には，少くとも三つの意味を區別することが出來はしないであらうか。その第一は，社會から制裁されず擯斥されず，一通りに世を渡つて行く爲に守らなければならない一定の規範である。この意味に於ける「道德的規範」が，同一時代の同一社會に唯一つしか存在しないことは，大體認めてよいであらう。もつとも，これは極めて漠然たる不確定なものに過ぎない。然るに，かくの如きは最も低い寬い意味に於ける「道德的規範」であつて，我々の良心は，たとひ社會から擯斥されず制裁されない程度の行爲や心情に對しても，必ずしも常に滿足してはゐない。卽ち，個人々々の心に存在する道德的信念又は理想は，現實社會に行はれてゐる行爲の便宜的標準よりも，一層高く

且嚴格なものである。ここに「道德的規範」の第二義が存在する。さて，この個人々々の心に存在する道德的信念は，各人が過去十數年乃至數十年間に受けた教育や實地經驗が，その人に固有の性格に基いて統合された結果であつて，極めて根底の深いものであり，その人の心のままに動かし得るものではなく，あたかも個人を超越した客觀的の標準であるかの如く感ぜられる。卽ち，各個人は，自己の道德的信念によつて，他人を批判するばかりでなく，又自分自身をも批判するのである。卽ち，道德的規範は，その本性に於て超個人的なものであり，等しく萬人に妥當する所の絕對唯一の標準たるべく要求されてゐる。これ卽ち「道德的規範」の第三義である。

「道德的規範」の第二義，卽ち個人の道德的信念は，その第三義，卽ち超個人的標準としての道德的規範に合致すべきものであり，且その信念の所有者自らはこの兩者の同一であることを信じてゐるのであるが，もし純粹に第三者の立場に於て觀察するならば，兩者は必ずしも常に一致してはゐない。卽ち，一の個人の道德的信念と他の個人の道德的信念とが互に矛盾し衝突することは，決して珍しいことではない。何故なら，個人々々は，過去に於て受けた教育や實地經驗が皆それぞれ違つてゐるのみならず，その性格がさまざまであるのに從つて，同じ經驗內容を感受する際にもそれから受ける印象やそれに對する反應が人によつていろいろ違つて來るから，それらの結果として獲得された道德的信念が人によつて違ふことは，當然のことである。殊に，傳統的思想が久しく浸潤してゐる老人たちと，當面の事情に基く要求に敏感である少壯者との間に，道德的信念の不一致を見ることは，決して怪むに足らない。併し，又一面から言へば，性格は人によつて千差萬別であるとは言ひながら，人の本性には自ら萬人に共通する或物が有る。又，道德的信念は，一度や二度の訓誡などによつて出來たものではなく，久しい間に幾度となく敎へられ，叱られ，褒められ，又

感銘し，憤激し，同情し，憎惡し，後悔し，反省する間に，何時とはなしに獲得されて來たものであるから，一時的の空想や氣まぐれや個人的好惡とは自ら違ふ。老若貧富の差は有つても，同じ時代に大體同じやうな雰圍氣の中に成長して來たものであるから，同一時代に同一社會の中に生活する人々の心に成立する道德的信念は，自然大同小異のものとなるのが普通である。たとひ枝葉の點では相異なつてゐても，主要な根幹に於ては萬人同一であるといふ事實が認められればこそ，各人の持つ道德的信念が窮極的には相一致すべきものであり，又相一致し得るものであるといふ希望も生れて來るのである。それ故に，各人の所有する道德的信念は，互に一致しない點は有るにしても，決して個人が任意に構成した思想ではなく，そこには自らその時代にその社會全體を支配してゐる精神的傾向が强く現れてゐる。又，事實，その信念の所有者自身にとつては，それは自分の自由になるものではなく，あたかも自己からは獨立した客觀的の規範であるかのやうに感ぜられてゐるのである。(註 1) それ故に，個人の心に存在する道德的信念は，一面に於ては幾分の個人的差異，個人的着色を有すると同時に，一面に於ては，その所有者自身から獨立し，所有者自身を拘束する所の集團意識に屬するものである。(註 2) 而して，音韻觀念も亦全然かくの如く，一面に於て幾分の個人的差異を有すると同時に，一面に於てはその所有者自身から獨立し，所有者自身を拘束する所の集團意識に屬するものである。勿論，相互に意思を理解しあふ機關としての使命を持つ同一言語の音韻である以上は，元來個人によつて相違すべきものではなく，その言語を用ゐるすべての人に共通なるべく要求されてゐるものである。さればこそ，個人によつて音韻狀態に多少の差異有る場合には，それらの中いづれが正しくいづれが訛であるかといふ問題が起るのである。併し，かくの如き問題が實際起るといふことは，卽ち，音韻狀態がすべての人を通じて同一なるべく要求されてゐながら，事實に於て必ずしも同一でないといふことを示す

ものである。音韻觀念は，あたかも道德的信念がその所有者の行爲の規範となり指導精神となるが如く，その所有者の發音運動の規範となり指導精神となる。而して，社會的規範は元來その社會に屬するすべての人に共通なるべく要求されてゐるものであるが，事實上各個人が自ら社會的規範と信じてゐる所のものは，必ずしも完全に相一致してはゐないのである。

今，假に，同一社會の中で，老人の所有する道德的信念と少壯者の所有する道德的信念との差異が稍顯著に感ぜられるやうになつたとすれば，老人は自己の信念に照して考へ，少壯者の信念を誤れりとして非難するかも知れない。併し，もしその少壯者の信念が，唯一個人の空想でなく，その時代の眞實の事情に基く止むべからざる要求から出たものであつたとすれば，新に世に出て來る青年の少くとも大部分は皆大體同樣の信念を抱懷するに至るべく，從つて，如何に一部の人が非難しようとも，大勢の趨く所，遂にはこの新しい信念がその社會全體を支配する指導精神となるに至るであらう。同樣に，もし，同一言語社會の中で，老人たちの所有する音韻體系と青年たちの所有する音韻體系との差異が顯著に感ぜられるやうになつた(例へば，老人たちは A, B 兩音韻を區別して記憶してゐるのに，青年たちはこの兩者の區別を知らない，といふ風な場合) とすれば，老人たちは自己の音韻體系に照して考へ，青年たちの音韻體系を誤れりとして非難するかも知れない。併し，もし青年たちの音韻體系の特色が，當時の社會全體の上に現れた發音運動の一般的傾向を反映してゐるものであつたとすれば，その社會に新に生れて來る小兒たちは皆この新しい形によつて音韻體系を獲得すべく，舊體系を維持してゐた老人たちが漸次死滅して行くにつれて，かつては破格と見られてゐた新しい音韻體系がつひにはその社會全體を支配するやうになるであらう。

かやうに，相異なる二種の音韻體系 (勿論，この差異は，一小部分に關する僅少なものでなければならない)が，同時に同一言語社會の中に並存

し得ること，卽ち，舊體系を規範と信ずる老人たちが，新體系を規範と信ずる少壯者たちの言語に對して不滿を抱きながらも，なほ兩者の間に於て言語の意義の理解が兎も角も行はれて行くといふ狀態が，事實存在することは，一面では又，個別的音韻變化の產物が社會に採用されることの，或程度まで可能なことを暗示するものである。卽ち，右のやうな狀態の下では，同一社會の中に同じ語が新舊二つの形で行はれ，且兩者共に通用するのである。然らば，旣述のやうな，個人的に偶然な機會から起る個別的音韻變化によつて發生した形が，まづ或個人の言語意識の中に固定せられ，更に模倣・感染によつて漸次社會に擴り，舊來の形と並用されるに至ることも，或は有り得べきではあるまいか。卽ち，新しい形が，或人々からは訛として輕蔑されながら，なほその言語社會に暫く舊來の形と並存することも，或は可能ではないかと考へられる。但し，ここに問題となるのは，個人から發生した形を果して社會が受け容れてくれるだらうか，といふことである。勿論，無條件では受け容れてくれまい。受け容れられるためには，それ相應の理由が無ければならない。

さて，G. Tarde に據れば，凡そ或改新が模倣によつて社會全體に擴るためには，二種類の原因が考へられる。論理的のものと不論理的のもの (logiques ou non logiques) とがこれである。卽ち，「論理的原因は，一つの個人が或特定の改新を以て他の改新より一層有用である，若しくは一層眞理である，換言すれば，此の特定の改新は從來彼の精神中に存在せし目的若しくは原理(これもとより常に模倣に依る)に對して，他の改新よりも一層適合すると思ふことに依り，他の諸改新を捨てて其の特定の一改新を選擇せる如き場合に於ては，常に作用してゐるのである。斯くの如き場合に於て，其の古い若しくは新しい發明若しくは發見は夫自體，問題となつてゐる唯一のものである。それらは其の傳播者の人格若しくはそれらの始めて生起せし時と所とに附着せる如何なる威信若しくは如何なる不信用

とも全然關係が無い。併しながら，論理的作用が斯くの如くに全然その純粹なる形に於て行はれるのは極めて稀である。一般には，超論理的勢力（それについて私は今さきに仄めかした）が，從はるべき模型の選擇に當つて干涉し來るのである。而して，屢，後にも述べるであらう如き，論理的には最も惡い改新でも，その起原の故に，或はその時代の故にさへ，選擇される場合が生ずるのである。」(註 3) と。

今，個別的音韻變化によつて生じた個人的形が漸次社會に擴つて行く事情を考へるに當つても，やはり，Tarde に倣ひ，(A) 論理的原因 (causes logiques) と (B) 超論理的勢力 (influences extra-logiques) との作用を區別することが出來る。卽ち，

(A) 最初は單なる個人的の癖として存在した形であつても，その形が何らかその社會に受け容れられるに足る長所を持つてゐる場合には，模倣によつてその形が漸次世間に擴つて行くことが無いとは言へない。長所とは，例へば，新に發生した形を採用することにより在來の同音語との間に明瞭な區別を設け得る場合，(註 4) 新しい形の方が舊來の形に比して短少であるとか或はその他何らかの理由によつて發音運動の勞力を節約し得る場合，(註 5) 新しい形の方が偶然或種の通俗的語原意識を一層よく滿足させる場合，その語の意義にふさはしい擬聲的又は擬態的の效果を現し得る場合，音色の上に何か一層好ましい點が有る場合，等を指すのである。

又，

(B) 最初は單なる個人的の癖として存在した形であつても，その使用者が社會に於て然るべき地位に在る人ならば，模倣によつてその形が世間に擴つて行くことが無いとは言へない。但し，ここに地位と言ふのは，寧ろ相對的な意味で言ふのである。例へば，父母や子守の癖が幼兒によつて模倣される。家族中の年長者の癖が年少者によつて模倣される。小學敎師の癖が兒童によつて模倣される。先輩の癖が後輩によつて模倣される。勢力

家の癖がその追隨者によつて模倣される。人望ある政治家・軍人・宗教家・藝術家などの癖がその崇拜者によつて模倣される。上流の人の癖が下流の人によつて模倣される。これらいろいろな場合の中には，模倣者自身が自己の慣用する形と異なる形を明かにそれと知りつつ模倣する場合も有らうけれど，殊に小兒などの場合には，未だ全然知らない語を習得する際，その習得された形が被習得者に特有の個人的語形であることを知らず，それを唯一の形と信じておぼえ込んでしまふことが多からうと思はれる。

個別的音韻變化によつて出來た形が社會一般に採用された具體的な實例について見るならば，恐らくこれら種々なる論理的及び超論理的原因の相協力した結果である場合が多からう。

次に，かやうな論理的並に超論理的の諸勢力は，單に個人的な形が社會に採用される際の必要條件たるのみならず，又，既に社會に流布してゐる新しい形が，舊來の形との競爭の結果，結局勝つて相手を絶滅させるか，負けて自ら滅びるかの運命を決する際にも，亦重要な關係を持つものである。もと同じ源から出た二つ以上の形(所謂 Doppelformen) は，その間に意義・用法上の分化を生じない限は，必然的に相互の間に競爭が起り，間も無くその一方が廢滅に歸すべき運命に在る。例へば，奈良朝時代の國語には，マスミ・マソミ(眞澄)ツガ・トガ(栂)タヅキ・タドキ(手着)ツヌ・ツノ(角)のやうに，同じ語が《u》を含む形と《o》を含む形と二つの形で現れてゐる例が相當多いのであるが，平安朝以後まで保存されたのは，マスミ・トガ・タヅキ・ツノ等の形だけであつて，他の一方は亡びてしまつたのである。然るに，カズ・カゾフ(數)に於ては，同じ語根が《u》を含む形と《o》を含む形と二樣の形で現れてゐる點は前の場合と同じことであるが，この場合には，《u》の形は名詞に，《o》の形は動詞に，各使ひ分けられてゐたために，この對立だけは現今まで奈良朝時代のまま殘つてゐる。(中古に，カゾフの代りにカズフ(註6)といふ形を用ゐた例が少數あるけれど，一時的のも

のだつたやうである。）ラテン語の mē から出た古代フランス語の moi, me（現今も同じ綴）や，古代英語の ān から出た中世英語の oon（現代の one）an（現代の an, a）が，いづれも現代まで保存されてゐるのは，それらの形相互の間に意義・用法上の使ひ分けが存したからである。(註 7) 又，倭名類聚鈔に「膍臍」を訓じて「保曾，俗云倍曾」と言つてゐる，この二つの形は，共に千年後の現代まで保存されてゐるけれど，ホゾ（類聚名義鈔に據れば，古くはホソと淸んでゐたものらしい)(註 8)とヘソとの間には倭名類聚鈔の時代に旣に雅俗の區別が存したのみならず，前者は主として文章語に，後者は主として口語に，といふ風に別々の體系の中に傳へられたものであるから，それによつて兩者の競爭が避けられ，共に現代までその生命を保つやうになつたのであらう。（鎌倉時代に於けるホソとヘソとの語感の相違は，塵袋に「ホソトハヘソヲイフ歟」(註 9)と言つてゐることから略推察することが出來る。）現代の東京の言葉では，「私」(わたくし)から出た第一人稱代名詞が，ワタクシ・ワタシ・アタクシ・アタシ等さまざまの形で行はれてゐるが，これらの間には，自ら，話手の性別や相手との交際關係の親疎や敬意の程度などによる使ひ分けが存する。（例へば，ワタクシとワタシとの關係は，アナタとオマヘとの關係に略相當する。）もしこれが人代名詞でなかつたら，とうにどれか一つの形に統一されてゐる筈である。

J. Vendryes は言ふ。「久しい間信ぜられて來た所では，あらゆる音韻變化は個人から出發するものであり，ただ個人的變化が一般化されたものに過ぎない，といふことになつてゐた。併し，この考へは不正確である。如何なる個人も，相手の本性に背くやうな發音を自分の仲間の人々に對して强制する力を持つてゐた筈は無い。音韻變化を一般化し得る强制力は何處にも無い。一の社會集團にとつて音韻變化が規範的のものとなるためには，その集團に屬するすべての人が，それを成就するやうな本然的傾向を自發的に持つてゐなければならない。これを模倣に歸せしめることは，こ

の場合見當違ひである。並みと違つた發音は，その創始者に對して一人も追隨者を生じないのみならず，通常は却つてその人の態度を滑稽に感ぜしめるやうになるばかりである。(註 10)」と。併し，これについては，普遍的音韻變化の場合と個別的音韻變化の場合とを區別して考へなければならない。普遍的音韻變化はその原因及び起原を社會全體に有するものなるが故に，その結果として生じた新しい形は，生れながらに社會全體の共有財產である。從つて，この場合には，新に生じた形が特に社會によつて採用されるといふ手續は不要である。採用を待たずして，既に社會の有だからである。然るに，個別的音韻變化の方は，その原因及び起原を個人に有する。而して，その結果として生じた新しい形は，最初は或個人の言語意識の中に固定される。かかる個人的語形は，その發生原因から見れば，個人的一時的偶然的のものに過ぎない。併し，たとひその發生原因はどうあらうとも，その結果として發生した新しい形が，その社會に受け容れられるに足る長所を具へてゐるならば，社會によつて採用され，社會全體の共有財產の中に編入されることが出來る。又，新しく發生した形の使用者が，若干の追隨者を生ずるに足る程の權威を社會から認められてゐる人ならば，その新しい形も亦多かれ少かれ社會的に認められるやうになる。

思ふに，社會的勢力そのものの性質を直ちに個人々々の模倣性に歸せしめようとする Tarde の見解は未だ事實の全面を正しく把握してゐるものとは認め難いが，併し，既存の社會集團の中で，一つの特定の集團意識的觀念が新に發生しようとするに際し，その發生過程の一部として個人々々の模倣作用が參與し得ることは事實である。無論，如何なる個人も，相手の本性に背くやうな改新を仲間の人々に對して强制する力を持つてゐる筈は無い。併し，その社會集團に屬するすべての人が，その形を受け容れるやうな傾向(註 11)を自發的に持つてゐる場合には，たとひその起原に於ては個人的な形であつたものでも，社會一般に好まれ採用されるに至ることは可能

である。個別的音韻變化は，元來，音韻の問題と言はんよりは，寧ろ語の問題である。それ故，もし個別的音韻變化によつて出來た個人的語形が時としては更に社會全體に採用される可能性の有ることを絶對に否認する人あらば，その人は又同時に，個人によつて創造された新しい語が時としては社會全體に採用されるやうになる可能性の有ることをも否認しなければならなくなるであらう。

註　(1)「元來事物なるものは，それ個有の存在を有するものである。故に，個人が諸事物と相對するときこれ等の事物は既に形成されたものであり，而して個人は，これ等の事物をして存在せしめざることも不可能であり，またこれ等の事物をして現在の樣式と異なる樣式に於いて存在せしむることも不可能である。かくて個人は，これ等の事物を斟酌すべく强制され，これ等の事物を變形することが頗る困難となる(敢て不可能とは言はれないが)。何故困難であるかといふに，これ等の事物は，社會がその諸成員の上に有つところの物質的及び精神的至上權に，種々の程度に於いて參加してゐるからである。疑ひもなく，個人は之等の事物の發生に際し一の役割を演ずる。然しながら，一の社會的事實の存在し得るためには，數多の個人が少くとも彼等の作用を合同しなければならず，またこの結合が何等か新らしき所產を生じなければならぬ。而してこの綜合物は我々各人の外部に生ずるものなるが故に(何故ならば，この綜合物中には複數の意識が這入つてゐるから)，それは我々の外部に，孤立的に考へられたる各個意識に依存しないところの或る種の行動方式及び或る種の判斷を，必然的に決定しまた設定してゐる。」(E. Durkheim : Les règles de la methode sociologique, 7. éd., 1919, préface de la seconde édition, pp. XXII-XXIII.) 譯文は田邊壽利氏譯「デュルケム社會學研究法」(昭和三年) 36—37 頁に據つた。

2)「かくの如く諸々の社會的信念及び社會的慣行が外部から我々に浸透するといふことは，必ずしも我々がそれを受動的にまた何等の變更を加へずに受取るといふことを意味するものではない。我々は右の社會的信念及び社會的慣行を考慮に入れ且つ自己に同化することによつて，それ等を個人化し且つそれ等に多少とも個人的なる我々の標示を付するのである。このことは，感覺世界を考慮する際我々各人がそれを自己流に著色し，かくて異なれる多數主體が同一物理環境に異なれる樣式に於いて順應すると等しい。これ我々各人が，或る程度まで，自己の道德，自己の宗教，自己の技術 (technique) を有つてゐる所以である。如何なる社會的一致物 (conformisme social) でも，個人的色彩の全階程を容認しない樣なのはない。然しながらそれと同時に，許されたる變異の範圍は限定されてゐる。この變異の範圍は，變異が容易に犯罪となるところの

宗教的若しくは道德的諸現象の圈內に於いては，皆無か若しくは非常に狹いけれども，經濟生活上の總べてに對しては可成に擴げられてゐる。然しながら經濟的諸現象の場合でも，早晩，我々は飛び越えられざる一の限界に出會ふであらう。」(Durkheim 前揭書 (註 1) 同序文 p. XXIII 脚註 1) 譯文は田邊氏前揭譯書 (註 1) 38 頁に據る。

(3) G. Tardé: Les lois de l'imitation, 2. éd., 1895, pp. 153—154. 譯文は風早八十二氏譯「模倣の法則」(大正十三年)に基き，卑見によつて之に多少の改訂を加へた。

(4) 例へば，「眠る」と「舐る」とは，新撰字鏡・色葉字類抄(三卷本)・字鏡集の如き古辭書では，何れも共にネブルと記されて居り，文明十六年の溫故知新書も亦さうである。然るに，天文十七年の運步色葉集や，その後の饅頭屋本節用集・易林本節用集(慶長二年)等では，「眠る」をネムル，「舐る」をネブルとして，兩者を互に區別するやうになつてゐる。

(5) もつとも，長い形よりも短い形の方が歡迎されるといふのも，短さの程度によることである。餘り短い形は，却つて種々な不便を生ずるので，次第に廢棄される傾向がある。フランス諸方言に於ける蜜蜂の名に關する J. Gilliéron の研究は有名である。卽ち，フランス北部では，ラテン語 apem の系統を引く本來の語は，音韻變化の結果短縮されて é となつた。この é は餘りに語形が短いため次第に廢棄され，それに代つて，或は南方系の abeille, 或は mouche à miel, 或は mouchette, 或は avette など，地方によつて異なる種々の新しい語が採用されるやうになつた。A. Dauzat 曰く，「先づ音韻的に不具な語がある。アルセーヌ・ダルメステテルは，その鋭い直觀力を以つて，『餘り短い語』が言語上弱い事を感じてはゐたが，然し正確に此の現象を理解するに至らなかつた。吾々は今日では，短小語の缺點は一面に於てその箇別性の缺除に在り，又他面に於て，その結果容易に同音衝突と癒着を起す事に在る事を識つてゐる。一語が語たる役目を果す爲には，明確な聽覺像を作つて，一事物或は一觀念を喚起する事が必要である。此の爲には，自己に類似する聽覺像から自己の聽覺像を區別するに足るだけの特徵ある音群を持つ事が必要である。語は音を多く持てば持つ程長くなり，箇別化されて，他語と混同せられる惧が少くなる。俚語に於てさへ學者語の語彙が勝利を得るのは此の爲である。之に反し，é (蜜蜂)と云ふ語などは，如何なる箇別性を持つてゐるであらうか。é は形態上不安定であつて，同音の末尾音と區別され難く，特に文中に於て，冠詞や他語の末尾音と連つた場合は尙更である。文語は是等の語を除去したり又は其の缺點を治したりする。是等の語は語の切れ目每に引つかかり，文意不明を來して常に面倒を起すからである。」(La géographie linguistique, 1922, p. 89. 譯文は松原秀治氏譯「言語地理學」100—101 頁に據る。) と。日本語でも，ナ(名)をナマへと言ひ換へたり，セ(背)をセナカと言ひ換へたり，ヲ(尾)をシッポと言ひ換へたり，兎角單音節語を嫌ふ傾向がある。

(6)「人なみなみにかずへ知らるるきはの法師も俗も」(狹衣物語)「計カスヱ」(三井寺法明院藏金光明經天承二年點，圖書寮御藏群書治要建長七年點)等。

(7) 第十六七世紀頃のフランス語は，例へば pere—pese, mere—mese, Maria—Masia, Paris—Pazis, bericle—besicle, nariller—nasiller, chaire—chaise 等のやうに，r と s (=z) との相違によつて分化した多くの Doppelformen を持つてゐた。その後，競爭の結果，各二つの中の何れか一方が淘汰され，現今ではただ père, mère, Maria, Paris, besicle, nasiller の形のみが殘つてゐる。但し，chaire と chaise とは共に現今までその生命を保つてゐるが，これは二つの形の間に意義上の使ひ分け (chaire 講壇 chaise 椅子) が生じてゐるためである。(W. Meyer-Lübke: Historische Grammatik der französischen Sprache, I, 4. und 5. durchgesehene Auflage, 1934, S. 156 f. 參照)。

(8) 沖繩では，現今でも fusu と清んで言ふ。

(9) 塵袋第六に「ホソトハヘソヲ云フ歟。男ヲホソツキタルモノト云フハヘソノツキタル歟。然者女ニトテモヘソナカルヘキニ非ス。如何。」かやうに，ヘソといふ語を以てホソといふ語を解釋してゐる。又，同卷「後悔スルニハホソヲクフトイフ事ソノ說如何。」の下に引いた左傳の本文並に杜預の註には何れも臍をホソと訓じてゐるのに，その次に之を平易に說明してゐる文では，「ウツフキテクハントスレトモクハレヌハヘソナリ。クヤシキ事ヲシテ，トリカヘサントスレトモ，カナハヌハ，ヘソヲクハントスルニ，ヲヨハスシテクハレヌカ如シトタトフル也。」のやうに，すべてヘソの形を用ゐてゐる。これによつても，當時，ホソは文章語であり，日常普通にはヘソと言つてゐたことが分るのである。

(10) J. Vendryes: Le langage, introduction linguistique à l'histoire, 1921, p. 48.

(11) この「傾向」とは，必ずしも，その社會集團に屬するすべての人に共通の素質といふ風な永續的なものから出たものでなくてもよい。ただその場合に於ける共通の利害關係といふ風な一時的事情の結果であつてもよいわけである。

## 四

最後に，所謂「音韻法則」(Lautgesetz) の問題について考へて見たいと思ふ。音韻法則といふものが果して實際存在するかどうか，といふことについては，肯定する人もあらうし，或は否定する人もあるかも知れないが，兎に角，音韻變化が，多くの場合，或程度の規則性を以て現れるといふ事實は，何人にとつても疑ふべからざる所であらう。然らば，音韻變化は何故規則的に現れるか，卽ち，その規則性の根據は如何。又，その規則性はどの程度まで保證されるか，卽ち，その規則性の限界は如何。これらの點を究明することが，卽ち本章の任務であり又本篇全體の主要目的の一つである。

音韻變化の規則性について，屢「音韻變化は音韻そのものの變化である。從つて，若干の語に限られた問題ではない故，その音韻を含むあらゆる語に於て，(特別の障碍となるべき條件の無い限りは，) すべてその變化が起る。」といふことが言はれる。この主張は正しい。けれども，「音韻そのものの變化」と言へば，私が言ふ所の「音韻の本質變化」に相當するものである。然るに，音韻變化の中には，「本質變化」以外になほ「用法變化」といふものが有る。而して，既述の如く，音韻の用法變化と雖も，その原因及び起原を社會全體に有する場合には，普遍的音韻變化として規則的に現れる。かくの如き普遍的用法變化の規則性は，右の說では未だ說明されないのである。

さて，「音韻法則に例外無し。」といふ Junggrammatiker の立場から言へば，音韻史上に於て外見上音韻法則に背くかのやうに見える形の發生する事實をば，類推(廣義)的變化の結果として說明しなければならない。結局「意義と關係無き純粹の音韻變化は常に規則的に起る。」といふことになる。つまり，音韻變化の規則性の根據を，「意義と關係無き」所に求

めようとする。併しながら，これだけでは，ただ研究法上の一つの要請たるに過ぎず，未だ說明にはなつてゐない。

かつて，H. Osthoff は，音韻變化は生理學の領域に屬し，類推的變化は心理學の領域に屬する，と言つた。この立場で行くならば，結局，「音韻の變化は，純生理的現象たる限りに於て規則的である。」といふことになる。つまり，これは，音韻變化の規則性の根據を，それが純生理的現象である，といふ點に求めようとするものである。然るに，實際に於ては，生理的現象と心理的現象とは相表裏するものであつて，互に切り離すことは出來ない。音韻法則の成立に缺くべからざる重要さを持つ所の所謂「音韻的條件」(lautliche Bedingungen) の如きも，寧ろそれを心理的條件として見る時始めてその重要な意義が理解されるのである。殊に，音韻はその本質に於て集團意識的觀念である。從つて，音韻變化の規則性の主要な根據は，之をその集團意識的性質にこそ求むべけれ，生理的性質に求むべきものではない。

音韻變化を純生理的現象と見ることは正しくない。それは，その重要な一側面に於ては心理的現象として觀察されなければならない。併しながら，之を心理的現象と見るにしても，兎に角明瞭な自覺的意志によつて舊來の制度が變改されるのでないことは，確かに事實である。この無自覺性といふことは，音韻變化の重要な特色の一つである。而して，音韻變化が常に無自覺の間に進行し，從つて氣まぐれな意志の干涉を許容しない，といふことは，音韻變化が規則的に進行し得るためには缺くべからざる條件の一つである。併し，この無自覺性といふことは，決して純粹な音韻變化のみの持つ特性と言ふことは出來ない。その原因に自覺的意志を含まないといふ點から言へば，例へば Kontamination の如きも，一般の音韻變化と少しも違ふ所は無い。然らば，單なる無自覺性といふことだけでは，未だ音韻變化の規則性を充分根據づけるには足らないのである。

それ故に，私は，音韻變化の規則性の根據を，それが純生理的現象であるといふ點にも求めず，又それが無自覺的に起る現象であるといふ點にも求めずして，之をその社會性に求める。

既述の如く，音韻變化には，その行はれる範圍の上から見て，普遍的と個別的との二つの典型を認めることが出來る。個別的音韻變化は，その原因及び起原を個人に有するもので，個々の語に對する偶然な聽き誤りや記憶の誤から起り，新に發生した形はまづ個人の言語意識の中に固定せられ，時としては模倣によつて更に廣い社會範圍にも擴り得るものである。之に對して，普遍的音韻變化は，その原因及び起原を社會全體に有するもので，從つて，それに關係する音韻は，どんな語の中に在る場合でも，一般にその變化に與るものである。何故なら，その原因となるものは，一時的偶然的な事情ではなく，その時代の社會全體の上に現れてゐる發音運動の一般的傾向だからである。

さて，右のやうな普遍的音韻變化に際して，もし或一つの，又は若干の語の場合に限つてその變化の起らないやうな事實が(個人的の現象でなく)社會全體にわたつて現れたとすれば，そこには何か，それらの語に特有な事情にして，その社會に屬するすべての人又すべての場合に共通なものが，原因として存在しなければならない。かやうな原因として一往考へ得るものには，

(a) 各語について固定的に定まつてゐるアクセントの關係。

(b) 語の中に於けるその音韻の位置。

(c) 同じ語の中でこれと近接した位置に在る他の音韻との聯合關係。

(d) 同じ語の中でこれより比較的遠隔の位置に在る他の音韻との聯合關係。

(e) その語と意義上關係ありと感ぜられる他の語形との聯合關係。

などが存在する。

右の中，(a) 及び (b) が，それらの語に特有な事情にして，而もその社會に屬するすべての人すべての場合に共通な事情であることは，言ふまでもない。

まづ，(a) が普遍的音韻變化の條件となることについては，既に第一章や第二章で述べた。但し，既に述べたのは，おもに强弱アクセントの場合のことであつたが，高低アクセントの場合についても，同一の音韻が，音調の相違によつて，相異なる形に發達して行くことは，音韻史上に實例の存する所である。例へば，現代北京官話では，《uei》は，陰平・陽平では〔ui〕に近く，上聲・去聲では〔uei〕に近く發音される傾向が强い。灰陰平〔χui〕回陽平〔χui〕悔上聲〔χuei〕會去聲〔χuei〕の如く。この種の現象は，この外にも，支那諸方言にその例が少くない。而して，音調の異なるにつれて母音音韻の實現される形が大いに異なる時は，つひには，その時代に新に言語を習得する小兒たちは，それら各の形を，あたかも相異なる二種の音韻の實現であるかの如く誤認し，そのまま二種の音韻として別々に記憶するやうになるかも知れない。現に，かうして音韻變化の起つた例も，實際に存在する。例へば，現代の厦門方言では，古への豪・歌・戈諸韻に對應するものは《o》韻であり，模韻に對應するものは《ɔ》韻である。(註1) 上聲・去聲の場合も之に准ずる。この種の方言は現今臺灣にも廣く行はれてゐる。(註2) 然るに，同じく臺灣に行はれてゐる近似の方言の中には，上聲に限つて全然《o》韻を缺き，それに相當する位置にすべて《ɔ》韻を現してゐるものがある。(註3) 例へば，高陰平《ko》に對して草上聲《ts'ɔ》あり，多陰平《to》歌陰平《ko》羅陽平《lo》何陽平《ho》佐陰去《tso》に對して左上聲《tsɔ》可上聲《k'ɔ》我上聲《ŋɔ》あり，波陰平《p'o》和陽平《ho》過陰去《ko》坐座陽去《tso》に對して果上聲《kɔ》火上聲《hɔ》あるが如く。(但し，模〔姥暮〕韻に於ては都陽平《tɔ》徒陰平《tɔ》覩上聲《tɔ》妬陰去《tɔ》杜渡陽去《tɔ》の如く，五聲共に《ɔ》韻である。從つて，

高歌陰平《ko》と孤陰平《kɔ》とは區別されてゐるが，可上聲と苦上聲とは全く同音の《k'ɔ》である。）そもそも，舌骨と甲狀軟骨とは筋肉によつて結合されてゐるのであるから，舌の働きと喉頭狀態とが相關聯し得るといふことは，容易に想像し得る所である。(註4) 併しながら，右の諸事實が果してそれによつて說明さるべきものであるかどうかは，未だ輕々しく斷定することは出來ない。(註5) これらの場合，母音音韻の實現に際してその口形を種々異ならしめる直接の條件は，寧ろ，音の高さの相違に隨伴する强さや長さの相違に存するかも知れないからである。(註6)

次に，音の高低は，元來聲帶の張緩並に開閉によつて調節されるものであるから，音を發する際の喉頭狀態と密接な關係を持つてゐることは言ふまでもない。支那吳方言やチベット語に於て，無聲子音で始る音節が高い音調を有し，有聲子音で始る音節が低い調子を有するが如きは，注意すべき事實である。(註7)

又，音韻の長短がその口形に影響を與へた例は少くない。例へば，長い母音音韻は，短い母音音韻に比すれば，その實現に持續的の努力を要し，從つて發音器官に一層强い緊張を伴ふのが普通である。之に反して，短い母音音韻は，發音器官を比較的弛緩させて發音される傾向がある。かやうな關係は現代の英語やドイツ語には明かに認められる所であるが，古代のラテン語に於ても，i, u, e, o の長音と短音との間に，略同樣な關係が存したものと考へられる。(註8) 而して，舌の筋肉の弛緩は當然舌面を低下させるものであるから，その傾向が甚だしくなつた結果，或時代になると，新に言語を習得する小兒にとつては，本來の ī と ĭ との間に於て，舌の位置の高低の對立が本質的なものとして記憶されるやうになつた。u, e, o についても亦同樣である。後世，卑俗ラテン語に於て，古代の ī, ū がその本來の i, u 類の音價を保持してゐたのに對し，古代の ĭ, ŭ は ē, ō と合して閉音 ẹ, ọ となり，古代の ĕ, ŏ の系統を引く開音 ẹ, ọ から區別され

てゐた[註 9]狀態は，かかる事情から歷史的に說明され得るのである。

(b) の事情は，(c) から明瞭に區別し得ない場合が多い。例へば，平安朝時代の日本語に於て，《F》は，文節[註 10]の頭 (Anlaut) では保存されたが，文節內部 (Inlaut) では《w》に變じた，といふ事實について考へて見よう。この場合には，同一の音韻《F》が文節の頭と文節內部とによつて，相異なる形に發達して行つたのであるから，その條件の種類は確かに (b) に屬するものと言ふことが出來る。併し，一面から言ふと，《F》の有聲化は，その前後の有聲母音に同化された結果と考へられる。然るに，文節の頭の場合には，《F》の後には有聲母音が有つても，《F》の前には何ら有聲の音が無かつた。從つて，この場合には，同化のための條件が不充分であつたために，《F》の有聲化が起らなかつたものと見ることが出來る。かく考へるならば，條件の種類は畢竟 (c) に歸することとなる。併しながら，「語の中に於けるその音韻の位置」といふことは，普遍的音韻變化に對する條件としては，それ自身として獨特な意味を有する。卽ち，その語に含まれてゐる音韻の中にも，語形全體の特色を表すものとして，必要缺くべからざるものとさまで重要ならぬものとが存する。而して，語形全體の特色を表すためにさ程重要ならぬ音韻は，日常の發音の上では，兎角その實現が粗略になり易い。かかる傾向が顯著になり，且社會全體の上に一般的なものとなる場合には，新に言語を習得する小兒たち一般に對し，聽き誤りを生ぜしめる原因ともなり得る。然るに，一定の音韻が，その語形全體の特色を表すものとして重要な地位を占めるか否かといふことを決定する諸條件の中に於て，その語の中でのその音韻の位置如何，といふことが極めて重要なものであることは，容易に理解されることである。さらば，この意味に於て，「語の中に於けるその音韻の位置」が，普遍的音韻變化に對する條件となり得ることは，當然のことと考へられる[註 11]。例へば，語の末尾の部分が非常に弱められることなどは，いろいろな言語の音韻史上に屢見ら

れることである。(註 12)

(c) と (d) とは，外觀上は單に程度の問題に過ぎないやうに見えるけれども，その實大いに事情を異にしてゐる。例へば，古代高地ドイツ語で語形《piligri:n》が《piligri:m》(註 13)に變化した事情について考へて見よう。この變化は，個別的音韻變化(註 14)であつた。卽ち，《piligri:n》の《n》を發音しつつある瞬間に，語頭の《p》の表象が未だ消失せずに殘つてゐたため，その影響を受け，語形《piligri:n》が偶然〔piligri:m〕のやうな形で實現された。かやうな形を聽いた小兒(或は，必ずしも小兒でなくても，未だこの語を知らない人)が，それをあたかも語形《piligri:m》の實現であるかの如く誤認し，その通りの形で記憶してしまつたため，ここに，その個人の言語意識の中に，《piligri:m》といふ形が成立するに至つたのである。

そもそも，語形《piligri:n》の中に含まれた音韻《n》を發音しつつある瞬間には，《n》は單獨に思念されてゐるわけではなく，語形《piligri:n》の中の音韻《n》として思念されてゐるのである。卽ち，《n》を發音しつつある瞬間には，《piligri:n》といふ語形全體が漠然とその背後に思念されてゐる。然るに，この際，「思念されてゐる」といふことは，必ずしもその對象のすべての部分が一々明瞭に「表象されてゐる」といふことを意味しない。その本質に於ては，寧ろ，超經驗的な「意味」として全體が把握されてゐることを意味するに過ぎない。かくの如く思念されてゐる全形《piligri:n》の中で，音韻《n》を發音しつつある瞬間に於て顯在的に表象されてゐるものは，ただ一部分に過ぎない。勿論，《n》の直前に發音された《i:》の表象などは，未だ必ず意識の表面に殘つてゐるであらう。併し，《n》から遙か遠隔の位置に在る《p》などに至つては，未だ表象の殘つてゐる場合もあらうが，又，既にその表象が全く消失してしまつてゐる場合も少くはなからう。卽ち，表象の有無やその明瞭不明瞭の程度は，人により場合によつて種々さまざまである。卽ち，その場合々々の個人的一時的

偶然的事情により，さまざまに動搖する。故に，《piligri:n》を〔piligri:m〕と發音することの如きは，ただ時として偶然現れる現象たるに過ぎず，決して，その時代にその社會全體の上に現れてゐる一般的傾向となることが無い。從つて，(d) の如き事情は，個別的音韻變化を起す緣とはなり得るけれども，普遍的音韻變化に對する條件とはなり得ないのである。

之に反して，例へば西部低地ザクセン系の Ostbevern 方言に於て，語形《trappn》が《trappm》に變化したのは，(註 15) 普遍的音韻變化によるものであつた。卽ち，《trappn》の《n》を發音する瞬間には，直前に發音された《p》の表象も未だ意識の表面に殘つてゐるため，その影響を受け，《trappn》が〔trappm〕のやうな形で實現される傾向を生じたものと見える。かやうな傾向は，その當時社會全體の上に一般的に現れるに至つた。かくて，《trappn》《bli:bn》等の《n》が多くは〔m〕の形で實現されるのに對し，《strɔ:tn》《buɑddn》等の《n》は常に〔n〕の形で實現されるので，その時代に新に言語を習得する小兒たちにとつては，〔trappm〕〔bli:bm〕等の〔m〕と〔strɔ:tn〕〔buɑddn〕等の〔n〕とを同一音韻觀念の實現として解することが困難になり，最初から，前者を《n》とは別の音韻觀念《m》の實現であるかの如く誤認し，その通りの形で記憶するやうになつた。かうして，「語の末尾の《n》は，《p》の後では《m》に變化する。」といふ法則の形で普遍的音韻變化が起るに至つたのである。

さて，右の場合，語形《trappn》の《n》を發音する瞬間に於て，《trappn》の全形が「意味」として思念されてゐることは勿論であるが，その際，必ずしもその語形に含まれたすべての音韻が一々顯在的に表象されてゐるわけではない。但し，《n》の直前に發音された《p》の表象の如きは，無論未だ消失せずに殘つてゐる。これは，確かにすべての人すべての場合についてさう言ひ得る。何故なら，今發音したばかりの音韻の表象が，次の瞬間には既に全く消えてしまつてゐる，などといふことは，決して有り得べ

からざることであるから。同様に，語形《trappn》の第二の《p》を發音しつつある瞬間には，その直後に發音せらるべき音韻《n》の表象の如きは，無論既に意識の表面に現れてゐる。これ亦，確かにすべての人すべての場合についてさう言ひ得ることである。何故なら，全く豫期せずして直ちに次の音韻へ移ることは出來ない道理であるから。即ち，《p》を發音しつつある瞬間に《n》が同時に表象されて居，《n》を發音しつつある瞬間に《p》が同時に表象されてゐる，といふことは，如何なる人如何なる場合についても，全く必然的に言ひ得ることである。この點に於て，《trappn》に於ける《p》と《n》との相互關係は，《piligri:n》に於ける《p》と《n》との相互關係とは大いに相違してゐる。從つて，前者の場合《p》の直後の《n》が〔m〕の形で實現される傾向の如きは，時としてはその社會全體に通ずる一般的な現象となることが出來る。故に，(c) の如き事情は，ただに個別的音韻變化の原因となり得るのみならず，又，時としては普遍的音韻變化に對する條件ともなり得るのである。

但し，「近接せる位置」と言つても，必ずしもすぐ隣のものばかりを指すのではない。間に一二の音韻を隔ててゐる場合もある。然らば，一體，どの程度までが「近接せる位置」であり，どの程度からが「遠隔の位置」になるのかといふと，それはそれぞれの言語やそれぞれの時代によつて違ふ。例へば，比較的早口で話す習慣のある社會では，かなり多くの音韻を隔ててゐる場合でも所謂「近接せる位置」たり得るが，之に反して，比較的ゆつくり話す習慣のある社會では，「近接せる位置」たり得る範圍が狹い，といふ風なことが考へられる。つまり，既に發音された音韻の表象が未だ消失せずにゐる，或は，將に發音されんとする音韻の表象が既に意識の表面に現れてゐる，といふことが社會全體を通じすべての場合を通じて大體承認され得る範圍，これ即ち「近接せる位置」の範圍なのである。

もつとも，必ずしも常に，距離に於て一層近い音韻の表象が，距離に於

て一層遠い音韻の表象よりも，必ず明瞭に現れてゐるとは斷言することが出來ない。條件の如何によつては，比較的遠距離に在る音韻の表象が案外明瞭に現れてゐることも有り得べきである。殊に，語形全體の中に於けるその音韻の地位如何といふことが重大な意味を持つものと思はれ，この點はゲシュタルト心理學などの研究問題として定めし興味あることであらうと想像される。併し，それにしても，今發音したばかりの音韻の表象が次の瞬間には既に全く消えてしまつてゐるとか，すぐ次に發音しようとしてゐる音韻の表象が未だ少しも意識の表面に現れてゐないとかいふ風なことは，到底有り得べからざることである。又，かくの如く二つの音韻が必然的に同時に表象されるといふ關係は，その二つの音韻が非常に相遠い位置に在る場合には，概して稀である，(註 16) といふことも亦原則として當然認めらるべきことであらうと思ふ。

なほ，ここにちよつと附け加へておきたいのは，普遍的音韻變化に於ける「音韻的條件」の意味である。右の (a) (b) (c) (d) 等の中で，前三者は普遍的音韻變化に對する條件となることが出來る。但し，この言葉の意味は誤解されてはならない。これら (a) (b) (c) の事情は，決して直接に音韻變化の條件となるのではなく，(既に述べ來つた所によつて明かである通り，) 直接には，現實の發音運動に對する條件となるのである。卽ち，同一音韻が實現されるに際し，その場合々々の條件の如何によつていろいろな形で現れて來る。その際，新に言語を習得する小兒たちがそれらの發音を聽いて，(發音者自身にとつてはすべて同一音韻の實現であるものを，) あたかも二種以上の相異なる音韻の實現であるかの如く誤認し且そのままの形で記憶するならば，そこに始めて音韻變化 (音韻分化，或は普遍的用法變化) が成立するのである。かくの如き出來事を所謂「音韻法則」の形で記述する場合，かの條件は所謂「音韻的條件」として記載される。然るに，現實の發音に於ては，語は通常は單獨に發音されるものではなく，具

體的な文の中の一部分として實現されるのである。從つて，同一の語も，前後のつながりの如何によつて，いろいろ違つた形で實現される。その際，新に言語を習得する小兒たちが之を聽いて，（發音者自身にとつてはすべて同一語形であるものを，）あたかも二種以上の相異なる語形の實現であるかの如く誤認し且そのままの形で記憶するならば，そこにはやはり音韻變化が起る。然らば，そこにはやはり，「前後のつながり如何」といふことが，一種の「音韻的條件」として現れて來る。かくの如き，世に言ふ satz-phonetisch な意味での「音韻的條件」としては，語の內部に關する「音韻的條件」がそのままあてはまる場合も少くない。併しながら，語が旣に (J. Vendryes の所謂 mot phonétique (註 17) として) 心理的に一單位を成してゐる以上は，その內部に關する「音韻的條件」と，外部との關係に關する「音韻的條件」とが，必ず常に同一であるとは保證し難いのである。

(e) については，(d) の場合と同樣に考へられる。例へば，karbunkel (註 18) といふ語を聽く際に vunke を聯想するといふことは，有り得ることではあるが，決してすべての人がすべての場合に後者を聯想するといふわけではない。兩者の關係は，ただ時として偶然的に結ばれ得るものに過ぎない。その際，聯想の有無や明瞭不明瞭の程度は，その場合々々に於ける個人的一時的偶然的な事情によつていろいろ變る。この點に於て，《trappn》に於ける《p》と《n》との關係が(すべての人すべての場合を通じて)必然的であるのとは，大いに趣を異にする。それ故，Kontamination や，その他すべて廣義の「類推」(Analogie) の中に抱括される諸變化は，常に，その原因及び起原を個人に有する所の個別的變化としてのみ現れる。決して，その原因及び起原を社會全體に有する所の普遍的變化として現れることは無いのである。

之を要するに，(d) (e) の事情は，なる程外形的には「それらの語に特有な」ものに相違無いけれども，發音に際して起る所の，音韻又は語形の

相互影響は，よし起り得るとしても，ただ一時的偶然的なものに過ぎず，從つて，「その社會に屬するすべての人すべての場合に共通な」條件とはなることが出來ないのである。

次に，日常頻繁に用ゐられる語句は，兎角無造作に言ひ放され易く，從つて，ごく不完全に實現される場合が多い。慣れてゐるため，それでも語形は充分把握され得るからである。例へば，ドイツ語の《gu:tən a:bənt》が〔na:mt〕と發音され，日本語の《soodesɯ》が〔so:zs〕〔so:s〕などと發音されるが如きは，これである。この種の語句は，新に言語を習得する小兒にとつては，兎角音韻の誤認や聽き落しが起り易いものと思はれる。例へば，英語の mistress が miss となり，ドイツ語の in das, in dem が ins, im となつた類は，皆右のやうな機會から起つた音韻變化と考へられる。この種の語句が發音されるに際し，調音の不完全さの程度は人により場合によつてさまざまであらうし，又，同じ時代に言語を習得する小兒たちのすべてが全く同じ形に聽き誤るわけでもなからう。故に，「その語がその言語社會に於て使用される回數の多寡」といふことは，「その語に特有な事情にして，その社會に屬するすべての人に共通なもの」とは言へようけれど，眞の意味に於て「その語の使用されるすべての場合に共通な事情」とは言ふことが出來ず，從つて，普遍的音韻變化に對する條件となり得る資格の一を缺いてゐる。それ故，miss や ins, im などのやうな短縮形は，恐らく，最初は若干の個人から起り，模倣によつて一層廣い社會範圍にも擴つたものと思はれる。又，事實，言語史の示す所に據れば，この種の短縮形は，その發生當初に於ては，（一般の個別的音韻變化の產物と同樣に，）暫くの間は舊來の長い形と共に二重形として並存し，同一言語社會の中に行はれてゐるのが普通である。

もつとも，右と類似の事情の下に在る語についても，その發音を不完全ならしめる事情が(すべての人すべての場合を通じて)かなり一般的なもの

として存在する場合には，その結果として音韻史上に現れる語形の變化も，かなり一般的な法則に從つて起ることがある。インドゲルマン系の多くの言語に於て，冠詞・人稱代名詞・前置詞・接續詞の類が，（すべての人すべての場合を通じて，）一般に弱く發音され，從つて，その結果として音韻史上に現れた語形の變化も，かなり一般的な法則に從つて起つてゐる場合がある，といふ事實の如きはその一例である。（例へば，近代英語の初期に起つた is, was, has, as などの s の有聲化の如き。）(註 19)

又，一方では，右とは反對に，例へば，ミナ(皆)オナジ(同)アマリ(餘)バカリ(計)がミンナ・オンナジ・アンマリ・バッカリとなつたやうな工合に，固有な意義の關係上特に强調されることの多い語は，特別な形に發達することがある。例をロマンス語に求めると，スペイン語及びポルトガル語の todo, -a は古典的ラテン語形 tōtus, -a の正統的後繼者であるが，イタリア語 tutto, -a レート＝ロマン語 tutt, -a フランス語 tout, -e プロヴァンス語 tot, -a の如きは，その祖形として，*-t- ならざる *-tt- を再構成せしめる。(註 20) これ亦右と同樣の理由によつて tōtus の -t- が -tt- に變化したものとして說明することが出來る。一般に，かやうな特別な形の發達した過程を考へて見ると，例へば，《mina》の語は，〔mina〕と發音されることも有つたが，强調されて〔min:a〕の如く發音される場合も少くなかつた。そこで，新に言語を習得する小兒たちの中には，この〔min:a〕の形を聽いて，それをあたかも語形《miɲɔna》の實現であるかの如く誤認し，そのままの形で記憶する者が現れて來た。かくして《miɲɔna》といふ新しい形が發生するに至つたのである。但し，强調の有無や程度は，その社會に屬するすべての人すべての場合を通じて均等に行くものではなく，人により場合によつて種々さまざまになるものであり，又，そこに强調の强調たる所以が存するのである。從つて，右の如き事情は，「その語の使用されるすべての場合に共通な事情」とは言ふことが出來ず，卽ち，普遍的音韻變化

に對する條件となり得る資格の一を缺いてゐる。それ故，ミンナ・アンマリの如き新しい形は，最初は恐らく若干の個人の聽き誤りから起り，模倣によつて一層廣い社會範圍にも擴るやうになつたものと考へられる。

*　　*　　*

最後に，A. Leskien 以來 Junggrammatiker の人々によつて高唱された「音韻法則に例外無し。」といふ主張に對して，批評を加へておきたい。この主張の當否を考へるに先立ち，まづ「音韻法則」並に「例外」といふ名稱の意味を確定しておく必要がある。(一定の「法則」に對して，如何なるものを「例外」と見るべきかは，その「法則」の意味如何によつて必然的に規定される。)「音韻法則」は，一定の時代に一定の場所で一定の言語について起つた普遍的音韻變化の事實を，簡單にまとめて記述したものである。卽ち，一定の具體的な歷史的事實の，ありのままなる記述である。それは，飽くまで音韻變化そのものの現實的な記述である。決して音韻變化の裏面に働く原因とか力とかいふ風なものに關する法則ではない。それ故，苟くも，記述された音韻法則通りに變化の起らなかつた場合が有るならば，その原因の如何を問はず(それがいはゆる保存的類推の結果などとして說明されると否とを問はず)，すべて「例外」と見做さるべきものである。「例外」は，それを生ぜしめた原因がたとひ明白に說明されようとも，それによつて「例外」たる資格を失ふものではない。それは，ただ，「例外」の起つた理由が說明されたものに過ぎない。而して，「例外」の起つた理由を說明するといふことは，「例外」といふものの存在を明白に承認した上で始めて成立することなのである。これは，「音韻法則」といふものが，歷史上の具體的な一事件である音韻變化そのものの形を有りのままに記述した記錄である限りは，當然さうなければならないことである。(もしも，「音韻變化を起すべき傾向はあらゆる場合に働いてゐたけれども，この場合には別にそれに反抗する力が働いてゐたために，前者が外

形上に現れなかつたものに過ぎない。故に，この『例外』は，ただ外形上の『例外』に過ぎず，眞の『例外』ではない。」と言ふ人有らば，それは，「音韻法則」を，あたかも音韻變化の裏面に働く原因とか力とかいふ風なものに關する法則であるかの如く誤解してゐるものであつて，大きな誤と言はなければならない。）但し，勿論，その音韻變化の起るより前，或は起つてから後に生じた，個別的音韻變化や Kontamination や類推的構成や借入の結果による不規則な形は，音韻法則の例外問題とは關係が無い。

既述の如く，私は個別的音韻變化といふものの存在を公然と認める。併しながら，これは，決して，私が「音韻法則に例外無し。」といふ主張に反對する，といふことを直ちに意味するものではない。何故なら，音韻法則といふものは，元來，普遍的音韻變化についてのみ成立する概念である。個別的音韻變化は，最初から法則の形で言ひ表すことの出來ないものであるから，音韻法則とは關係が無い。つまり，「音韻法則に例外無し。」といふことは，「普遍的音韻變化の進行は常に全く規則的にのみ起る。」といふことを意味するに過ぎないからである。

さらば，普遍的音韻變化，卽ち，その原因及び起原を社會全體の上に有する所の音韻變化は，常に全く規則的にのみ進行するものであるか，といふと，これには問題がある。例へば，近代英語の初期に於て，design, dessért, resémble, resént, posséss 等の《s》（綴字 s）は皆《z》を以て置き換へられた。(註 21) 思ふに，この條件の下に於ける普遍的音韻取替《s》→《z》の將に起らうとしてゐる時代には，社會一般の傾向として，《s》はこの條件の下では極めて不完全に實現されることが多く，實際上は〔z〕又は之に近い形で實現されることが普通になつてゐたのであらう。それ故，その時代に新に言語を習得する小兒たちにとつては，この位置に現れる〔z〕又はそれに近い音聲の或者と他の位置に現れる〔s〕とが同一音韻觀念《s》の實現であることを正しく認識することが困難になり，且，この位置に現

れる〔z〕又はそれに近い音聲の中で《s》の實現であるものと《z》の實現であるものとを辨別することが出來なくなつて，結局この位置に現れる〔z〕又はそれに近い音聲をすべて音韻觀念《z》の實現として認識し，且そのままの形で記憶したものであらう。かくして，この條件下に於ける普遍的音韻取替《s》→《z》は起つたものと思はれる。然るに，この位置に現れる音聲の中でも，本來《s》の實現であるものは，たとひ現實の發音の上には〔ẓ〕や〔z〕のやうな形で現れてゐても，被習得者としてはやはり《s》の積りで發音してゐるのであるし，從つて，現實の發音の上でも稀には〔s〕に近い形で實現されることも皆無ではなかつたらう。(註22) 例へば，語形《po′ses》は，この時代には，最も普通には〔po′ẓes〕〔po′zes〕のやうな形で實現されたことであらうが，稀には〔po′ses〕に近い形で實現されることも皆無ではなかつたらう。故に，その頃言語を習得した小兒等の大部分は，最も屢現れる〔po′zes〕のやうな發音を聽いて，(被習得者の方では《po′ses》の積りで發音してゐるのに，) それをあたかも《po′zes》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶したことであらうが，この時代には，要するに，同じ語形《po′ses》が現實の發音の上には〔po′zes〕〔po′ẓes〕〔po′ses〕等いろいろな形で現れてゐたのであるから，つまり，聽きやうによつて，《po′zes》とも《po′ses》とも聞えるやうな狀態に在つたわけであり，從つて，稀には之を《po′ses》の形で習得した小兒も皆無ではなかつたらう。もつとも，當時，時代の大勢は，この條件の下では《s》は〔z〕に近い形で實現され，從つて，新に言語を習得する小兒等にはあたかも《z》の實現であるかの如く誤認される，といふ傾向であつたから，たとひ偶然の機會から possess を《po′ses》の形で習得した小兒と雖も，design, dessert, resemble, resent 等大多數の語はやはり一般の同年輩の小兒たちと等しく《z》の形で習得したことであらう。而して，同年輩の多くの小兒たちは，design, dessert, resemble, resent, possess 等の語を全部《z》の形で習

得したことと思はれるのである。かくの如く，普遍的音韻變化に際して，個人的偶然的な機會から，「個別的音韻不變化」の起ることは，有り得べきことと思はれる。かやうな「個別的音韻不變化」は，右のやうな普遍的用法變化の場合には時として起り得ることであるし，又，本質變化の中でも，音韻分化のやうな場合には，起ることが全然無いとは斷言しかねる。(註 23)

普遍的音韻變化に際して「個別的音韻不變化」が起るについては，時としては意義の要素がその原因として關係すること勿論である。例へば，右の音韻變化が將に起らうとする時代には，《bi′seid》(*beside*) は，最も普通には〔bi′zeid〕〔bi′zeid〕稀には〔bi′seid〕に近い形でも實現された。卽ち，聽きやうによつては《bi′seid》の實現とも聞えるが，兎角《bi′zeid》の實現であるかの如く聽き誤られ易い傾向が有つたものと思はれる。而して，desígn, dessért, ...等の場合から類推するに，この場合にもやはり大多數の小兒たちは，最も普通に現れる〔bi′zeid〕のやうな形を聽いて，それをあたかも語形《bi′zeid》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶したものであらう。然るに，既に《seid》(*side*) を習得してゐる小兒たちの或者は，〔bi′zeid〕〔bi′zeid〕〔bi′seid〕等の發音を聽くに當り，意義上關係有る《seid》を想起したために，この場合には(被習得者の意圖する通り)それが《bi′seid》の實現であることを正しく把握することが出來た。かくて，この語を《bi′zeid》の形で記憶してゐる多くの小兒たちの間に混つて，この語を舊來の通り《bi′seid》の形で記憶してゐる小兒が少數存在してゐた。もつとも，當時，時代の大勢は，この條件の下では《s》は〔z〕に近い形で實現され，從つて，新に言語を習得する小兒等にはあたかも《z》の實現であるかの如く誤認される，といふ傾向であつたから，たとひ beside を《bi′seid》の形で習得した小兒でも，design, dessert, resemble, resent, possess 等大多數の語はやはり一般の同年輩の小兒たちと等しく《z》の形で習得したことであらう。而して，同年輩の多くの小兒たちは

design, dessert, resemble, resent, possess, beside 等の語を全部《z》の形で習得したことと思はれるのである。かくの如く，普遍的音韻變化に際して，意義上の關係に引かれて，個人的に「個別的音韻不變化」の起ることは，有り得べきことと思はれる。右の beside[註24]がよしやその適例でなかつたとしても，一般的に見て，右のやうな過程による「個別的音韻不變化」は起り得べき道理である。かやうに意義と關係有る「個別的音韻不變化」を，俗に「保存的類推」(英語 preservative analogy) と呼んでゐる。

所謂「保存的類推」の問題を考へるに當り，H. Paul は之を「一個人に於ける音韻發展」(die Entwickelung an dem einzelnen Individuum 卽ち一個人の一生涯の間に起る音韻發展)の進行中に起る現象として考へ，その結果，その存在の可能性を認め澁つてゐるのである。[註25]これはまことに尤もなことと思ふ。併しながら，所謂「保存的類推」を，「一個人に於ける音韻發展」中の現象と見ずして，言語習得の際に起る現象として考へるならば，右に考へた通り，これは時として起り得べきことなのである。

普遍的音韻變化に際して起る「個別的音韻不變化」(意義と關係無きもの)及び「保存的類推」を，「聽き誤りによる個別的音韻變化」及び「聽き誤りによる Kontamination」と比較するならば，「個別的音韻不變化」は言はば「消極的な個別的音韻變化」とも稱すべく，「保存的類推」は言はば「消極的な Kontamination」とも稱すべきものである。「個別的音韻變化」及び「Kontamination」の方は，大多數の人が正しく認識するものを，少數の人が誤認する，といふ過程であるが，之に反して，「個別的音韻不變化」及び「保存的類推」の方は，大多數の人が誤認するものを，少數の人のみが正しく認識する，といふ過程である。併し，いづれにしても，その結果としては，本來同一の語形であつたものが，今度は人によつて相異なる形で記憶されるやうになる。その中，少數者のみの記憶してゐる形は，多數者の記憶してゐる形に壓倒され，誤つた形として排斥され，最初前者

の形でその語を習得した人さへも後には後者の形に倣ふやうになり，前者はやがてその社會から消失してしまふのが普通であらう。併しながら，前者が何らか後者よりも勝つた特色を持つてゐる場合や，他人に模倣追隨される程の權威を社會から認められてゐる人々によつて使用される場合には，最初少數者のみの形であつたものも，模倣によつて次第に廣い社會範圍に擴り，元來多數者の形であつたものと相並んで二重形 (Doppelformen) を成し，競爭の結果，前者が後者を壓倒して之を絶滅せしめ，獨りその社會に用ゐられるやうになる場合も有り得るのである。

さらば，「音韻法則に例外無し。」といふ主張の當否は如何。思ふに，「普遍的音韻變化の結果として，法則に叶ふ形は必ず發生する。」といふ意味に於てならば，この主張は大體正しいと認めてよいであらう。併しながら，その「法則に叶ふ形」と同時に，「法則に叶はない形」も亦，同一言語社會の一部に發生し得るものである，といふことは承認しなければならない(「個別的音韻不變化」や「保存的類推」の場合を指す)。

又，この「普遍的音韻變化の結果として，法則に叶ふ形は必ず發生する。」といふことが確實に保證されるのは，嚴密な意味に於て完全な典型的な普遍的音韻變化の場合だけである。卽ちその原因及び起原が，一定地域に居住するすべての人に存在するやうな音韻變化の場合だけである。然るに，一見普遍的音韻變化の如く見え，且大體に於て普遍的音韻變化と言つてよいものの中でも，必ずしもその全部が右のやうな典型的な普遍的音韻變化であるわけではない。既に述べた通り，普遍的音韻變化と個別的音韻變化との間には，いろいろな程度の中間物が存在するからである。卽ち，音韻の用法變化の中で，その原因を個人の偶然な聽き誤りや記憶の誤に有するものは個別的音韻變化たり得るのみであるが，その聽き誤りを惹起する原因が當時の社會全體の上に現れてゐる發音運動の一般傾向に存するものは普遍的音韻變化となつて現れる，といふことは，既に述べた所である。

然るに，その聽き誤りを惹起すべき發音運動の或傾向が，當時の社會全體にわたり又あらゆる場合にわたつて普遍的に現れるといふわけでもなく，又一時的偶然的に稀に現れるだけといふわけでもなく，ただ相當多數の人の發音運動の上に度々現れる共通の傾向といふ程度のものであつたとするならば，その結果として起る音韻變化はどんな性質のものになるであらうか。

例へば，我が奈良朝の言語に於て，「栂」《tuga》《toga》「手着」《taduki》《tadoki》「角」《tunu》《tuno》の如く，かなり多數の語は，《u》を含む形と《o》を含む形との兩樣の形を持つてゐた。これらの一方を他方言から借入された形と考へるためには，同樣の例が餘りに多過ぎる。又，それらの一方の形の發生を類推(廣義)の結果として說明することも困難である。かくの如きはどう說明せらるべきか。思ふに，上代の言語では《u》と《o》とが極めて相近い音價を持つてゐたために，(兩者は截然と區別された二つの音韻であつたに拘らず，)實際の發音の上では兩者が全然又は殆ど同じ形で實現されることもかなり多かつたのであらう。それ故，その頃新に言語を習得する小兒たちの中の相當多數の者どもは，若干の語については，本來《u》の實現である音聲をあたかも《o》の實現であるかの如く誤認し，又は本來《o》の實現である音聲をあたかも《u》の實現であるかの如く誤認し，且そのままの形で記憶してしまつた。かやうな傾向があつたために，一時右の如き二重形 (Doppelformen) を多數發生するに至つたものと考へられるのである。これは，言はば個別的音韻變化と普遍的音韻變化との中間に位する所の現象である。(かくの如き中間物の存在を事實考へ得るが故に，私は個別的音韻變化と普遍的音韻變化との二つをば，音韻變化を二つに分類したものとは見ず，音韻變化の中に認められる二つの典型と見る。) この種の音韻變化は，上の場合の如く，單に一時的傾向たるにとどまることも有らうけれど，時としては，普遍的音韻變化の起る前提

として現れることも有り得る筈である。否，普遍的音韻變化(但し，音韻の合同・脱落又は用法變化の場合)は，常態としては，恐らくすべてこの種の中間的音韻變化によつて先行されるものであらうと想像される。

卽ち，普遍的音韻變化は，必ずしも最初から普遍的音韻變化だつたわけではない。寧ろ，個別的音韻變化から中間的音韻變化へ，中間的音韻變化から普遍的音韻變化へと，(社會範圍の上から見ても語彙範圍の上から見ても)漸次その範圍を擴大して行つた場合が多いやうに想像される。例へば，語の中より下のハがワと相混じたのは，普遍的音韻變化としては恐らく第十世紀以後に起つた現象であるけれども，ウルハシ(麗)の如きは，遲くとも第九世紀以來既(註26)にウルワシといふ形を持つてゐた。又，ジとヂ，ズとヅの混同は，普遍的音韻變化としては多分第十七世紀前半頃に起つた現象であるけれども，若干の語に於ては混同が既にそれ以前から起つてゐた(註27)やうである。

又，之を地域的に見るならば，甲地域に於て既に普遍的狀態にまで發達してゐる音韻變化が，隣接せる乙地域に於ては未だ中間的な狀態にとどまつて居り，又他の地域ではただ個別的音韻變化として稀に認められるに過ぎない，といふ風な場合も有り得るのである。例へば，フランス語に於て，Masia (=*Maria*), peze (=*père*), meze (=*mère*) 等の如く母音に挾まれた r を z に變ずることは，パリでは第十六世紀の頃一時盛であつたが，つひに普遍化するには至らず，第十七世紀には既に衰運に向つてゐた。その種の語形は，現今では，ただ chaise (<chaire), besicles (<bericle), nasiller (<nariller) にその名殘を留めて，全くその影をひそめてしまつてゐる。然るに，この變化は，本來パリ獨特のものではなく，寧ろ南方及び西南方の方言からの影響によるものと見られてゐる。南方の言語では，早くも第十四世紀にこの變化の起つてゐた形跡が存するのみならず，變化は語彙的にも社會的にも相當の廣範圍にわたつて起つたやうである。(註28) 例へば，A.

Dauzat の調査(註 29)に據れば，Auvergne の Vinzelles 方言では，この變化はつひに普遍化して，現今では，母音に挾まれた本來の r は，規則的に全部 z 類の摩擦音に化してゐる。又，Kr. Nyrop(註 30) に據ると，同じ傾向は champenois, blaisois, berrichon 等の諸方言にも見られ，Caux 地方や Jersey 島では更に著しい。Jersey の一詩人は歌つてゐる。

A Saint-Martin i disent *veze*
Faisant d'*r* un *z* comme en *peze*.
A Saint-Luothains et à Saint-Pierre
L'*r* entre voyelles se change
En *th*, est-che pon étrange ?

さて，諸方言の間に於ける音韻狀態の相互影響といふことは，必ずしも，語形の借入といふ形に於てのみ起るものとは限らない。音韻變化の原因となる所の，發音運動の一般的傾向そのものが，一定の地域から起つて，隣接せる地域へ次々感染して行く，といふ場合も考へられるのである。又，例へば，乙地域に於て《p》が〔F〕の形で實現される傾向が次第に增大しつつある時代に，隣接せる甲地域では《p》→《F》の變化が既に完結し，乙地域の《p》に對應する所にはすべて《F》を持つやうになつてゐたとすれば，甲地域の音韻狀態が乙地域の音韻狀態に影響し，その結果，乙地域に於ける《p》→《F》の變化が一層促進される，といふことも有り得べきことである。なほ，方言の相互影響といふことは，勿論，必ずしも相隣接した土地の間でのみ起るものとは限らない。交通關係だにあらば，首都の言語が遠隔せる邊地の言語に直ちに影響を及す場合もある。

凡そ，一言語が他言語からの影響を受けるについては，それは，自覺的に行はれることもあり，無自覺の間に起ることもある。今甲方言が乙方言に影響を與へるものとすると，(1) 甲方言の或音韻と，それに對應する乙方言の音韻との差異が，非常に大きい場合には，その影響は概して自覺的

方法によつて起る。卽ち，語形の個別的借入とか，音韻の自覺的學習とかいふ風な形でのみ起ることとなる。但し，兩者の差異が相當に大きい場合でも，乙方言の音韻自身が，自發的に，甲方言の音韻の現狀と同じ方向へ變つて行く傾向を示してゐる場合には，その傾向は，甲方言との接觸によつて，無自覺的に一層助長される。之に對して，(2) 兩者の差異が極めて僅少であり，殆ど同音價に近い場合に於て，甲方言の音韻が徐々に或方向に變化し始めたとすれば，それに惹かれて乙方言の音韻も亦無自覺に同一方向に變化して行くことは，容易に起り得べき現象である。但し，久しきにわたる社會的傾向の惰力は偉大なもので，たとひその上に共通語 (Gemeinsprache) の勢力が働いても，もし共通語の要求する方向がその方言の本來の傾向と正反對の向きを示すものである場合には，その影響は容易に實現されない。それを實現するためには，模倣者の自覺的努力を必要とする。例へば，東北地方の人が，その本來の《i》を共通語の《i》で置き換へ，殊にシとス，チとツを明確に區別しようと力めるやうな場合がこれである。之に反して共通語の要求する方向が，その方言の本來の傾向と一致してゐる場合には，その變化は，殆ど努力を要せずして，無自覺の間に自然に促進され得る。例へば，出雲地方の《F》が，共通語(又は隣接方言)の影響を受けて，徐々に《h》に變化して行く(註 31)が如きはこれである。かくして生ずる音韻變化は，それが全然無自覺的に進行するものである限りは，その進行過程に於て自發的音韻變化と少しも異なる所が無い。

凡そ，音韻變化の原因となる發音運動の上の或無自覺的傾向が，その社會全體にわたつて一般的に現れる場合には，それが他言語からの影響によるものであらうとなからうと，結果は普遍的音韻變化となる。之に反して，その傾向がその社會に屬する或一部の人々の發音の上の問題である場合には，それが他言語からの影響によるものであらうとなからうと，結果はただ不規則な中間的音韻變化か又は個別的音韻變化たるにとどまる。但し，

その發音傾向が社會に漸次擴つて行くにつれ，その結果として現れる音韻變化も，個別的音韻變化から中間的音韻變化へ，中間的音韻變化から普遍的音韻變化へと，次第に發展し得るものである。

例へば，我が國の諸方言に於て，クヮ・グヮの音節が漸次カ・ガに變じて行くことの如きは，多くは，既に自發的にその傾向の存する所へ，更に共通語(又は隣接方言)の勢力が加はつて之を助長しつつあるもののやうに見える。但し，それらの方言は一方では昔からカ・ガの音節を持つてゐるのであるから，クヮ・グヮからカ・ガへの變化は，音韻の用法變化に過ぎない。かやうな場合には，普遍的音韻變化を起さうとする傾向が全體として働きつつある一方，その實現に先立ち，個別的音韻變化や語形借入(共通語又は他方言から)や類推置換(「音韻變化の諸原因」篇第十一章參照)により，二三の特別の語に限つて，早くからクヮ・グヮの代りにカ・ガを用ゐるやうになつてゐる例が少くない。例へば，音韻調査報告書に據ると，長野縣下では，クヮ・グヮとカ・ガとを區別する地方に於て「正月」「二月」等の「月」をガツと言ふ。奈良縣下では，宇陀郡御杖地方を除く外一般にクヮ・グヮとカ・ガとを區別してゐるが，「正月」の「月」をガツと言ふ所が多く，「因果」をのみインガ又はエンガと言ふ所(生駒郡など)もある。又，「正月」の「月」に限り，拗音と直音と兩樣に言ふ所(三輪・上の鄉・初瀨地方)もある。その他，宇智郡では「活版」「生活」の「活」を直音に言ひ，磯城郡川東地方では「煉瓦」「外國」の「瓦」「外」を直音に言ふ，と報告されてゐる。この種の語の數は，恐らく，その後いよいよ增加してゐることであらう。

同一方言の中に存在するいろいろな言語的差異の中で，音韻問題を考へるについて特に重要なのは，蓋し社會階級によるものであらう。殊に，封建時代に於ける貴族と庶民との對立の如く，各人の所屬階級が血統によつて定まつて居り，一階級から他階級へ轉入することの困難な場合には，階級相互の間に明確な言語の差異を生じ，音韻體系さへも相一致しなくなつ

てゐる場合が少くない。而して，階級によつて相異なる音韻體系の間に起る相互影響は，方言の相互影響に似て，而も一層複雜なものであらうと想像される。例へば，フランス語に於ける famille などの ll は，古くは《ʎ》と讀まれたものであり，現今でも南部フランスの諸方言はこの形を保存してゐるが，北部では《j》に變化してゐる。さて，首都パリでは，《j》は，第十七世紀末には未だ "petite bourgeoisie" の言語の特色と認められてゐたに過ぎない。然るに，この形は漸次勢力を增し，第十八世紀の動搖狀態を經て，革命以後は上層階級に於ても確乎たる勢力を獲得するに至つた。(註 32) 又，趙元任に據ると，現代の支那の常州(江蘇省)城內の言語では，紳談 (the speech of the gentry) と街談 (the speech of the popular majority) とによつて，音調組織 (tone system) が截然と相異なつてゐる。但し，現今では，いろいろな家族の兒童が相混じて同じ學校に學ぶ結果として，雙方の音調組織の間に部分的混合が起りつつある，といふ。(註 33) これらは，大體に於て，封建的階級による音韻體系の差異，或はその名殘と見らるべきものであらう。資本主義社會に於けるブルジョアジーとプロレタリアートとの對立に於ては，封建的階級の場合とは異なり，一階級から他階級へ多くの人々が絕えず轉入しつつあるのであるから，勿論語彙などの差異は大いに存在するとしても，音韻體系に至つては，階級による差異は餘り發達し得ないかの如くにも想像されるが，事實は必ずしもさうではないやうである。O. Jespersen は左のやうに言つてゐる。「予の考では，最近百年間に英國の一都市の卑俗な言語と敎育ある階級の言語とが他に類の無いほど早く分裂していつた(殆ど凡べての長母音が變化した等)が，これを自然的に說明するものは十九世紀の前半に工業勞働者の間で小兒生活が前古未曾有の窮狀にあつた事——それは人があまり褒め過ぎる我が文明の最も不名譽な汚點の一つであるが——であるだらう。」(註 34)

**註**（1）　羅常培著「厦門音系」(國立中央研究院歷史語言研究所單刊，中華民國十九年) 11 頁參照。羅氏も言つてゐる通り，この《o》はいくらか中舌的な音である。

（2）　私の直接聽いた實例の中では，桃園出身の曹欽源氏は此の流儀であつた。

（3）　これは，私が直接聽く機會を得た所の，臺灣中部出身の甘文芳氏の音である。

（4）　Eÿckmann の研究に據れば，喉頭は，聲の高い時には上昇し，聲の低い時には下降する。(これは，舌の働きの問題とは直接關係は無いけれども，參考のため引用する。) Natier に據れば，喉頭は，舌の位置が a から i の方へ向ふに從つて上昇し，a から u の方へ向ふに從つて下降する。その他，同氏の觀察に據ると，聲門は，ę, ọ̈, ọ̈ の場合には線狀をなし，e の場合には紡錘狀をなし，i の場合には楕圓形をなす。聲帶は，ę の場合には輕く開いてゐるが，ę から i̧ へ向ふにつれて一層開いて來る。又，聲帶は，一般の母音に於ては平であるが，i̧ の場合には收縮して帶狀をなす，といふことである (G. Panconcelli-Calzia: Experimentelle Phonetik, 1921, S. 85 u. 111 ff.)。これらの事實は，我々が音韻變化の條件を考へる上にも，參考になることである。

（5）　H. Sweet の如きは，聲の高低昇降が母音の音性に與へる影響を恐ろしく重要視して，インドゲルマン語に於ける Ablaut の一部(ギリシャ語 híppe ～ híppos に現れた e ～ o の交替など)の發生原因を之に歸せしめようとさへした (The History of Language, 5 ed,, 1920, pp. 25 and 104.) のであるが，學界一般の承認する所とはなつてゐない。思ふに，聲の高低昇降が母音の音性に與へる影響は，有り得るとしても，音の强さや長さが母音の音性に與へる影響程に顯著なものではない。甘氏 (註 3) の方言に於ける上聲の降調が《o》の舌の位置を下後方へ引き下げる働きをなしたといふことは，有り得べきことではあるが，この場合母音變化の直接な主要原因となつたものが，果して高さであるか强さであるか長さであるかは，容易に判定しかねる所である。

（6）　旅順郊外雙島灣安嶺屯出身の潘明海氏は，古い山東系移民の子孫であるが，同氏の發音では，止攝及び蟹攝の合音として現れる《uei》韻（爲・未・貴・追・水・會・回・歲など)は，速く發音される場合には屢〔ui〕となる。もつとも，普通の速さでは，爲・未などのやうに頭音の無い《uei》音節は，大抵は〔uei〕と發音され，〔ui〕になることは稀である。頭音の有る《kuei》《suei》等の音節は，陰平・上聲の場合には〔-uei〕と發音され，陽平・去聲の場合には〔-ui〕と發音されることが多い。併し，要するに，〔uei〕と〔ui〕との間には明瞭な區別が無く，《uei》韻の實際の發音は，〔uei〕—〔uëi〕—〔ui〕の間を動搖してゐるのである。以上述べた所の諸傾向は，明かに，四聲の區別に伴ふ音の長短に關係してゐる。卽ち，潘氏の方言では，陰平・上聲は長く，陽平・去聲は短いのである。なほ，詳細は拙稿「山東系の一方言について」(方言第七卷第一號所載) を參照せられたし。

北京官話の場合には，四聲と《uei》韻の發音との關係は，安嶺屯方言の場合程簡單には說明されない。何故なら，北京官話では，上聲が他の三聲に比して著しく長いことは疑ふ餘地の無い事實であるけれど，去聲は陰平・陽平に比して特に長いといふわけではない。それ故，上聲の場合に《uei》が〔uei〕の形で實現される事實はその長さによるものとして說明し得るとしても，去聲の場合に《uei》が〔uei〕の形で實現される事實は何らか別の理由によるものでなければならない。その理由は，恐らく音の强弱と關係してゐるのではなからうか。それは，陽平の場合と比較することによつてさう思はれるのである。卽ち，陽平の場合には，聲の上昇につれて强さが急速に增大するので，自然《uei》の i の部分に最も力が入り，その反動で e の部分が閑却される。その結果《uei》が〔ui〕の形で實現されるやうになる。之に反して，去聲の場合には，聲の下降につれて强さが減少するので，《uei》の ue の部分に最も力が入り，i の部分は弱くなる。その結果《uei》が〔uei〕の形で實現されるやうになるのではなからうか。上聲の場合は，形が著しく長いのみならず，全長の中程に最も力が入る。それ故，《uei》の e の部分が完全に實現されて〔uei〕の形になることは當然である。陰平の場合には，上聲の場合のやうに特に長くもなく，去聲の場合のやうに特にその初の部分に力が入るといふ事情も無い。それ故，《uei》の e が明瞭に實現されず，〔ui〕の形で現れて來るやうになるのであらう。以上のやうな說明は，未だ充分なものではないかも知れないが，まづ當らずと雖も遠からざる所であらうと思ふ。

(7)　支那吳方言に於ける音節頭音の有聲・無聲の別と聲調との關係につき，實驗的に研究した結果を總括して，趙元任は左のやうに言つてゐる。「各調の陰(卽ち淸)と陽(卽ち濁)とを比較するに，前者(陰平・陰上・陰去・陰入)が後者(陽平・陽上・陽去・陽入)に比して幾分高いのみならず，聲調曲線の形狀に於ても，陽調は陰調に比べて少しく複雜である。これ恐らく，音節頭音を發する時，濁音が聲帶の形狀に影響して，そのために音の高さの變化が少しく複雜になるのであらう。」(淸華學校研究叢書第四種「現代吳語的研究」79 頁，中華民國十七年)と。

この問題については，吳方言の「濁」の子音に於ける聲門狀態が，普通の有聲狀態ではなく，所謂有聲 h (卽ち〔ɦ〕) の狀態に在るといふ事實(同書 27—28 頁)に，特に注意しなければならない。私がその地方出身の支那人に就いて實地に觀察した所でも，吳方言の濁音は，日本語の濁音のやうな綺麗な有聲音ではなく，喉がごろごろ鳴つて聞える。かやうに聲帶の振動が粗いので，そのピッチは勿論低く，從つて，これに接續する母音のピッチも，少くともその發端に於ては，當然低からざるを得ない。故に，濁つた頭音を持つた音節のピッチが概して低いことは自然である。

これに關聯して思ひ合せられるのは，インド語に於ける有聲 h と聲調との關係である。夙に第九世紀に於て，安然の悉曇藏卷五には，南天竺の僧寶月三藏

の ha の發音を説明して，訶上聲喉鳴と言つてゐるが，この「喉鳴」は，現代支那吳方言の濁音の場合と同樣に，聲帶の粗い振動を想像させる言葉であつて，甚だ興味がある。さて，T. Grahame Bailey に據ると，現代のパンヂャブ語では，〔ɦ〕(例へば *hindū* の *h*) の直後に立つ母音は，必ず low rising (又は low rising-falling) tone を持つ。卽ち，その人の發し得る最低の音より 1 tone 程高い所から始つて，4 乃至 5 semitones ばかり昇り，それから時としては再び 1 tone 程降ることもある (A Panjabi Phonetic Reader, 1913, p. XV.)。かやうに〔ɦ〕の直後に立つ母音が低い所から始ることは，前の支那吳方言の場合と同樣な生理的理由によるものと考へられる。

以上の二つの例は，何れも，音節頭音の有聲・無聲の區別が高さアクセントに影響を及す場合であつた。然るに，「無聲頭音と高ピッチ」「有聲頭音と低ピッチ」の關係が既に慣習的に確立してしまふと，この關係が Substrat (顯在的の，又は潛在的の)となつて，新に借入される語の音節頭音の性質の上に，逆に影響を及すことがある。卽ち，吳方言の多くのものは，中頃北方標準語から讀書音(文言音)を借入することにより，上聲の場合，高いピッチの《v》(微母)や《z》(日母)をも持つやうになつたが，靖江や江陰の方言では，後世では此の高ピッチの《v̇》や《z》を無聲の《f》や《s》に變化させてしまひ，「無聲頭音と高ピッチ」「有聲頭音と低ピッチ」の一般的關係を再び回復してゐる。(趙元任前揭書 22 頁 26 頁聲母表に於ける微母・日母の文言音を，76 頁の聲調表と對照せられたし。)

チベット語にも，支那吳方言の場合と類似の關係が存在する。卽ち，H. B. Hannah に據れば，チベット語に於ける音節頭音は左の六種に分たれる。

Masculine——Ka, Cha, Ta, Pa, Tsa.
Common——K'a, Ch'a, T'a, P'a, Ts'a, Sha, Sa.
Feminine——Ǵa, Ja, Ďa, B'a, Dz'a, Wa, Źhya, Źa, Ya.
Very Feminine——Nga, Nya Na, Ma.
Barren——Ra, La, Ha, 'A.
Neuter——A.

而して，頭音の性質とピッチとの間には，左のやうな關係が存在する。

1. Masculine 頭音で始る語は，堅く充實して高い調子で發音されなければならない。
2. Common 頭音で始る語は，中位の强さを以て中位の高さで發音されなければならない。
3. その他の三種の頭音で始る語は，軟く低い調子で發音されなければならない。

(A Grammar of the Tibetan Language, Literary and Colloquial, 1912, pp. 39—45.)

(8) 「Quintilianus は，その當時，卽ち西曆紀元後第一世紀の後半に於て，短

い e, i の音性が，それらの長い對當者 (ē, ī) の音性と相違してゐた由を證據立ててゐる。ラテン文法家たちの指示に從へば，長母音の音性の方が一層閉ぢてゐたのである。(ē, ō の方が i, u に近かつた。ī, ū の音は ĭ, ŭ の音よりも一層完全であつた。)」(A. -C. Juret: La phonétique latine, 2. éd., 1938, p. 65.) なほ，それらラテン諸家の說は，E. H. Sturtevant: The Pronunciation of Greek and Latin, 1920, pp. 20—21, 33—34 に，一々原文を以て引用されてゐる。

(9) 「短い i (發音は開音 i̯) は，疑も無く，第三世紀，又は特發的にはもつと早い時代に，殆ど帝國の全領土で e̯ となつた。」「短い u (發音は開音 u̯) は，恐らく第四世紀，又はもつと早い時代に，帝國領土の大部分で o̯ になつた。」(C. H. Grandgent: Introduction to Vulgar Latin, 1907, pp. 84 and 87.)

(10) 日本語に於て，所謂「音韻論的語」(mot phonétique) に大體相當するものは，橋本先生の御說に於ける「文節」である。これについては，既に「音韻體系」編第九章に述べた。

(11) 例へば，A. -C. Juret は，ラテン語に於ける語の中での諸音韻の價値 (valeur des phonèmes) について，左のやうに述べてゐる。「子音及び母音が最大の明瞭さを持つてゐたのは，單音節語の中に在る場合であつた。多音節語の中では，音韻の價値は，その持續度 (durée) に隨伴して，語の內部の音節 (syllabe intérieure) に於てよりも，語の末尾の音節 (syllabe finale) に於て一層弱かつた。その事實は，語の末尾音の取扱方 (traitement) によつて證せられる。語頭の子音は，增大する張力 (une tension croissante) を有し，從つて甚だ强力な位置 (une position très forte) に在つた。之に反して，語末の音節は，減少する張力 (une tension décroissante) を有し，從つて甚だ微弱な位置 (une position très faible) に在つたのである。」(La phonétique latine, 2. éd., 1938, pp. 25—26.)

(12) E. Sievers は左のやうに言つてゐる。「多くの言語(例へばサンスクリット語，又種々のドイツ方言)に於ては，無聲騷音 (stimmlose Geräuschlaute) が，語の內部 (Wortinlaut) で母音の前に立つ場合には原形を保つてゐるのに，同じ子音が語末 (Wortauslaut) に在る場合には，文の中でのつながりの關係で母音の前に立つと，軟化 (erweichen) される傾向がある。これは獨特な現象であつて，未だ充分に說明がつかない。」(Grundzüge der Phonetik, 1893, S. 267.) 併し，文を單なる音韻の機械的連結と見ず，語の中での位置による各音韻の心理的價値の相違に考へ及ぶならば，この種の現象は何ら難解なものではないのである。

(13) ラテン語の peregrīnus は，後には pelegrīnus に變化した。この語は第九世紀の頃古代高地ドイツ語に借入されて，piligrīm となつた。ラテン語からドイツ語への借入語に於て，本來の n が m に變つてゐる例としてはラテン

語 prūnum から出た Pflaume (中世高地ドイツ語 pflūme) もある。(F. Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, 10. Aufl., 1924, S. 371.)

(14) piligrīn から piligrīm への變化は，聽き誤りによるものか，或は記憶の誤によるものか，判明しない。ここでは假に之を聽き誤りの例として扱ひ，聽き誤りによつて起る個別的音韻變化の進行過程を考察しようとするのである。

(15) H. Grimme: Plattdeutsche Mundarten, 2. Aufl., 1922, S. 44 f.

(16) これは，影響を與へる音韻自體の性質にも關係がある。例へば，cerebral な音の如きは，舌尖を，自然的狀態に於てはそれと相對せざる所の遙か後方の口蓋部分に對せしめるといふ，甚だ特異な構造を持つものである。かやうな異常な特色は特に深く印象され易いので，發音に際しても，その表象が比較的長時間殘存する傾向がある。例へば，古代インド語では，母音及び n, m, y, v の直前に立つ本來の n は，同一語の中で r̥, r̥̄, r s̥ の後に位する場合には，palatal, cerebral 又は dental の子音 (y を除く)が兩者の中間に入る場合を除き，すべて ṇ に變化してゐる。これは，言ふまでもなく，本來の n が r̥, r̥̄, r, s̥ に同化されたものである。然るに，この變化は，普遍的音韻變化として起つたものであるにも拘らず，r̥, r̥̄, r, s̥, の影響が隨分遠方まで及んでゐる場合がある。bharamāṇaḥ, braḥmaṇyaḥ, bṛṃhaṇam, kṣipṇuḥ など。併し，arcanam, ardhena のやうな場合には，n が cerebral 化されてゐない。それは，r と n との間に，c, dh のやうな，舌の前部で作られる音が入つてゐるので，それらの表象によつて，r の表象が攪亂され，壓倒されてしまつたからである。又，arṇavena のやうな場合には，r は第一の n を cerebral 化したが，その影響は第二の n までは及ばなかつたものである。

(17) J. Vendryes: Le langage, introduction linguistique à l'histoire, 1921, p. 66.

(18) 中世高地ドイツ語 karbunkel は，ラテン語 carbunculus から出た語であるが，夙に karfunkel といふ傍形も生じてゐた。これは恐らく vunke (現代ドイツ語 Funke) を聯想した所から出來た變異形と思はれる。(Kluge 前揭書 (註 13) S. 243.)

(19) O. Jespersen: A Modern English Grammar, Part I, 3. ed., p. 202.

(20) A. Zauner: Romanische Sprachwissenschaft, I. Teil, 4 Aufl., 1921, S. 111.

(21) Jespersen 前揭書 (註 19) pp. 202—203.

(22) 第一章註 1 に引いた Jespersen の所說は，發音狀態そのものの觀察としては正當且有益なものである。Jespersen がデンマルク語について觀察した所を以て，近代英語の初期に於ける《s》の發音狀態を推すことが出來る。

(23) full, push 等の u《u》と sun, cut 等の u《ʌ》とは，本來は同一の《u》音であつたが，第十七世紀頃から二つに分化したものである (Jespersen 前揭

書 (註 19) pp. 330—335)。その分化條件は如何と見るに，Jespersen に據ると，《u》の保存されたのは多くは脣的子音の影響によるものである。殊に，脣的子音と《l》との間に挾まれた《u》は，保存されることが規則的 (pull, full, wolf, bullock 等)であつて，此の位置に現今《ʌ》の現れるのは，高尚な語 (pulse, bulb, fulvous 等)に於ける spelling-pronunciation だけのやうである。但し，脣的子音と《l》以外の子音との間に挾まれた《u》は，保存されてゐる場合 (put, pudding, butcher 等)もあり，又《ʌ》に變じてゐる場合 (bud, mud, much 等)もあつて，その分化の條件としては未だ明確なものが發見されてゐない。

(24) Jespersen 前掲書 (註 19) p. 204.

(25) H. Paul: Prinzipien der Sprachgeschichte, 5. Aufl., 1920, S. 70.

(26) 延喜奥書本日本靈異記の訓註に「姝，有留和之久」，地藏十輪經 元慶元年 (877) 點に「美，ウルワシ」「麗，ウルワシカラム」，新撰字鏡(昌泰 898—901 年間)に「嬪，加美宇留和志」「嬋媛，宇留和志」等。一般に，天曆 (947—957) 以前には假名遣が正しく，從つて語頭以外のハ《Fa》の音が全般的にワ《wa》と同音になつたのはそれより後のことと考へられてゐるのであるが，このウルハシといふ語の如きは，かやうに早くからウルワシといふ形を現してゐるのである。

(27) 古へ鯨にクヂラ・クジラの兩訓の有つたことは，類聚名義抄(院政時代)や塵袋(鎌倉時代)に見える。室町中期以前の寫本である頓要集にも，鯨をクシラ，地震をシシン (古典保存會本解說參照) 等と記し，慶長二年 (1597) の易林本節用集には，蚰蜒をナメクシリと記してゐる。又，「蹲る」は，前田家本色葉字類抄(平安朝末期寫) や觀智院本類聚名義抄(鎌倉時代寫)ではウズクマルとなつてゐるが，室町時代になると，天文十七年 (1548) の運歩色葉集や上記の易林本節用集のやうにウヅクマルと記したものもある(なほ，國語調査委員會編「疑問假名遣」(大正四年) 下編 120—124 頁を參照せられたし)。易林本節用集は，又，「洑」をウズマク，「矢筈」をヤハヅ(「弭」はユハズ)と註してゐる。併し凡そ慶長初年頃までも未だジとヂ，ズとヅを區別して發音するを以て標準音としてゐたことは，耶蘇會士所用のローマ字綴によつて知られるのであるが，當時都に於て既にその混同の起りつつあつた事實は，João Rodriguez の記す所である(橋本進吉先生著「吉利支丹教義の研究」所收「吉利支丹教義の用語について」73 頁)。下つて，元和六年 (1620) に草して翌年添削を加へたといふ日遠の法華經隨音句には「是只タ田舍ノミナラス京都ノ人モ亦濫スル有リ。然モ是ヲ糺ス時有人云輕重不同也等云云。私謂。不可然。只是齒音舌音ノ異ナラク耳。」と言つてゐる。假名遣書にしてジヂ・ズヅの使ひ分けを問題として採り上げた最初のものは，寛永三年 (1626, 異本には二年とする)西三條實條の奥書ある「假名遣近道抄」である。

(28) W. Meyer-Lübke: Historische Grammatik der französischen

Sprache, 1. Teil, 4 und 5. durchgesehene Auflage, 1934, S. 156 f.

(29) A. Dauzat: Études linguistique sur la basse Auvergne, phonétique historique du patois de Vinzelles (Puy-de-Dôme), 1897, p. 44. もつとも，ここに言ふ z 類の摩擦音とは，普通の z ではない。Dauzat に據れば fricative sonore interdentale である。

(30) Kr. Nyrop: Grammaire historique de la langue française (Tome premier), 1924, p. 347.

(31) 加藤義成氏「中央出雲方言の子音」(昭和十一年，音聲學協會會報第 42 號所載) 8 頁。

(32) Meyer-Lübke 前揭書 (註 28) p. 162.

(33) 「現代吳語的研究」(註 7 參照) 英文緒論 xiii 頁，支那文 80—81 頁。もつとも，かやうな場合には，階級的關係が方言的關係と結びついてゐる例が多い。例へば，日向の延岡町は，藩主內藤氏が磐城から移封した結果，今日に至つて，士族の階級はなほ東國系統の方言を使用し，周圍の九州方言に對立してゐる。又，佐賀の唐津町に於ても，士族と平民とで全く言葉が違ふ。これは，唐津藩主小笠原氏が奧州棚倉から移住した爲に，その遺風が言語の上に殘つてゐるのである(東條操先生著「國語の方言區劃」(昭和二年) 28—29 頁)。

(34) O. Jespersen: Language, its Nature, Development and Origin, 1922, p. 261. 譯文は市河三喜・神保格兩先生譯「言語，その本質・發達及び起原」(昭和二年) 480 頁に據る。